

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第35集

住宅・都市整備公団 浦和南部地区

埋蔵文化財発掘調査報告

明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし

1 9 8 4

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第35集

住宅・都市整備公團 浦和南部地区

埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告

みようばなむかい みようばなうえのだい いぬまがたうまつづみ
明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし

1 9 8 4

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

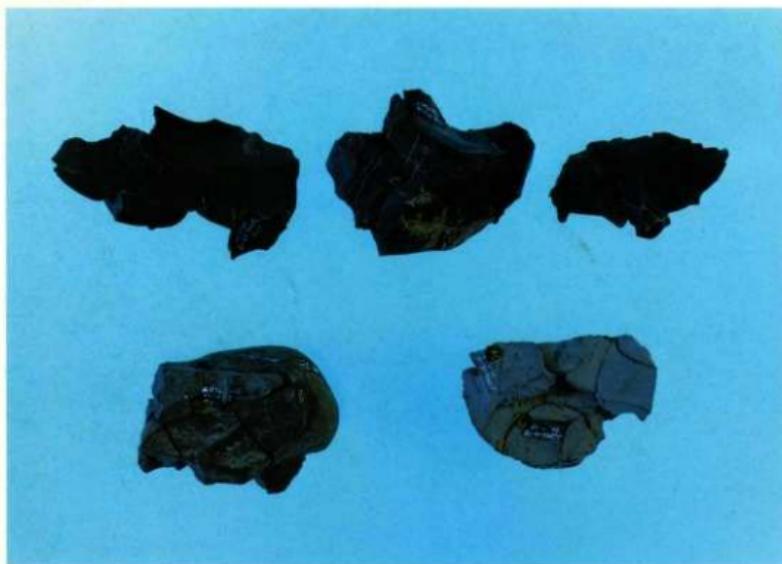


明花向遺跡A区M-6-17 グリッド西壁

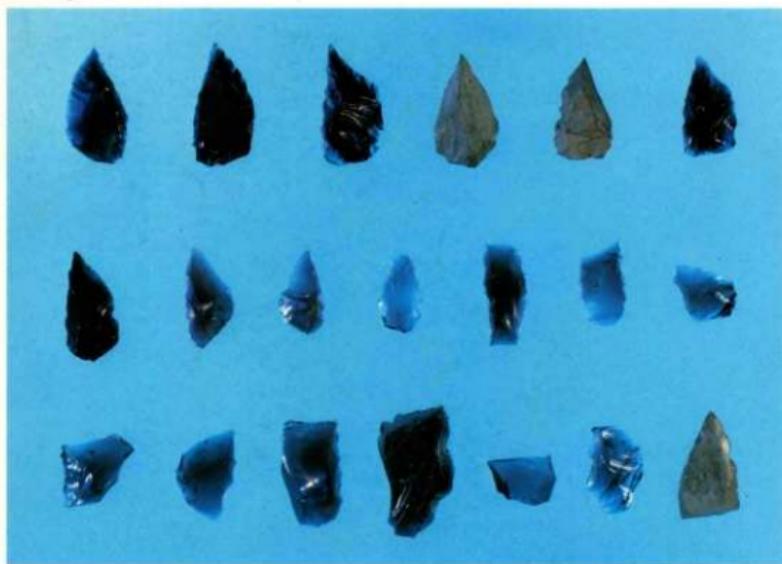


明花向遺跡C区D-7-16 グリッド砾群

巻頭図版 2



明花向遺跡A区先土器時代の石器(接合資料)



明花向遺跡C区先土器時代の石器(ナイフ形石器)



明花向遺跡B区第2号住居跡出土遺物



明花向遺跡B区第10号住居跡出土遺物



序

埼玉県の南部地域は、首都圏にあって著しい発展を遂げてまいりました。特に近年は、交通網や住宅地等の新たな整備・確保が強く求められております。こうした状況に伴って、大小の開発事業が広範な地域で、絶え間無く進行しております。こうしたなかでの埋蔵文化財保護は、各種の開発計画に対して、より適確な判断や処理を必要とされます。

住宅・都市整備公団の開発事業もこの一例で、浦和南部土地区画整理事業地内では、台地の大部分が埋蔵文化財包蔵地となっておりました。そこで関係各機関と綿密な連絡を取り、これらを現状保存すべく協議を重ねてまいりましたが、開発を避けられない6箇所については、やむをえず事前に充分な発掘調査を実施し、記録保存を行うことになりました。

発掘調査は、住宅・都市整備公団の委託を受け、昭和54年に埼玉県教育委員会が着手し、翌昭和55年4月からは、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、整理作業を含めて継続実施いたしました。

本報告書は、その調査結果をまとめたもので、各時代にわたる数多くの貴重な資料を提示することができました。この報告書が広く活用され、今後の埋蔵文化財保護に資するところがあれば幸いです。

末尾ながら、発掘調査・整理にあたり多大の御指導・御協力を賜わりました住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部・同埼玉東宅地開発事務所、浦和市教育委員会ならびに地元関係者各位に対し、深く感謝の意を表します。

昭和59年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

例　　言

1. 本書は住宅・都市整備公団浦和南部地区土地区画整理事業にかかる、下記の遺跡発掘調査報告書である。
 - 明花向遺跡A区（No 1 遺跡、昭和55年 5月20日 委保第5の1562号）
 - 明花向遺跡B区（No 2 遺跡、昭和57年 3月23日 委保第5の222号）
 - 明花向遺跡C区（No 3 遺跡、昭和54年11月12日 委保第22—1038号）
 - 明花上ノ台遺跡（No 6 遺跡、昭和56年 5月12日 委保第5の1277号）
 - 井沼方馬提遺跡（No 4 遺跡、昭和56年 5月12日 委保第5の1330号）
 - とうのこし遺跡（No 5 遺跡、昭和56年 9月28日 委保第5の2008号）
2. 発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課の調整を経て、住宅・都市整備公団の委託により、昭和54年 6月18日から着手した。翌昭和55年 4月1日からは財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の発足に伴い、これが昭和57年 9月30日まで引き続き実施した。整理・報告書作成も当事業団があたり、昭和57年10月1日より昭和59年 3月31日にわたり実施した。なお、調査組織は2～4ページに示した。
3. 出土品の整理及び図の作成は田中英司、劍持和夫、金子直行が主にあたり、金沢文雄、島村薰、柴崎正之、松村和男の協力があった。
4. 掲載した遺構写真は市川修、劍持、金子、佐藤典邦が撮影し、遺物写真は田中、劍持、金子が撮影した。
5. 本書の執筆及び挿図の分担は、先土器時代を田中、縄文時代の遺物を金子、他を劍持があたり、各文末には文責を記した。
6. 遺跡の土壤分析は株式会社パリノサーベイに、出土土器の胎土分析は第四紀研究所の井上巖氏に、¹⁴C年代測定は学習院大学の木越邦彦氏にそれぞれ委託した。
7. 本書の編集は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第四課職員があたり、調査研究部長横川好富、同副部長小川良祐が監修を行った。
8. 本書の作成にあたり、下記の方々より御教示を賜った（敬称略）
 - 荒井幹夫、石岡憲雄、岡本東三、織笠昭、実川順一、白石浩之、鈴木秀雄、谷井彪、戸田哲也、土肥孝、松沢亜生、宮崎朝雄

凡 例

1. 本書に用いた遺構の名称・番号等は、既刊の調査年報等のそれとは異なる場合がある。これは本書の作成に際し、発掘調査で使用したものを整理・改訂したためである。本書を正式報告とし、以下に示した各書についてはこれを訂正していただきたい。

- (1) 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団「年報」1 1981
- (2) 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団「年報」2 1982
- (3) 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団「年報」3 1983
- (4) 埼玉県教育委員会「埼玉県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度」1982
- (5) 埼玉県教育委員会「埼玉県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度」1983
- (6) 鍋持和夫「明花向遺跡の調査」第14回遺跡発掘調査報告会発表要旨 1982

2. 本書における遺構・遺物等の指示は以下のとおりである。

- ・遺構名は以下の略号で表記した。

S I ……住居跡、S B ……竪穴状遺構、S F ……炉穴、S K ……土壙、S D ……溝、S Z ……方形周溝墓、S T ……墓壙。

- ・縮尺は原則として以下のとおりである。

住居跡1/60、炉・貯蔵穴土層図1/30、方形周溝墓1/80、(但し土層図は1/40)、
土壙・炉穴1/40、遺物出土状態1/30、土器実測図(縄文1/5、弥生1/4)、土器
拓影1/3、先土器時代石器2/3

- ・X・Y数値は、平面直角座標第Ⅸ

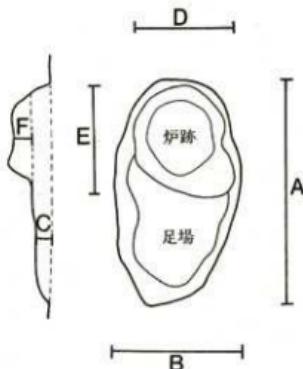
系座標に基づく各座標値を示す。

また、矢印の指示方向はすべて座標北を表わす。

- ・住居跡及び炉穴の位置は炉跡の存
在するグリッドで示し、他は遺構
の中心グリッドで示した。

- ・土層図中の水系レベル数値はすべ
て標高を示す(単位m)。

- ・遺構の主軸方向としたものは、そ
の遺構における長軸線の東・西へ
偏する角度である。(炉穴以外は



炉 穴 例 図

北を基準とする)

- ・炉穴の基數単位は炉跡の数に拘りなく、切り合いの最大規模でとらえ、これに炉跡数を加えてある。
- ・遺物出土分布状態において原則として、●はPで土器を、■はSで礫・石器を表わし、○、△、□等は接合関係にある土器を示した。
- ・炉穴の名称及び計測は例図のとおりである。規模—A×B×C、炉跡—D×E×F
- ・スクリーン・トーンの指示は以下のとおりである。

- 一住居跡及び炉穴平面図における赤焼部の範囲、住居跡及び炉穴断面図における焼土を多量に含む層、土器実測図における赤彩部分
- 一住居跡及び炉穴断面図における焼土及び焼土ブロック層
- 一住居跡及び炉跡断面図における灰層

3. 繩文時代の出土遺物は土器と石器、及び土製品に分けて記述した。土器は明花向遺跡・明花上ノ台遺跡・井沼方馬提遺跡・とうのこし遺跡の各遺跡から出土したもの総合して、以下のように大別する。

- 第Ⅰ群土器…撚糸文系土器群
- 第Ⅱ群土器…押型文系土器群
- 第Ⅲ群土器…貝殻文系土器群
- 第Ⅳ群土器…沈線文系土器群
- 第Ⅴ群土器…条痕文系土器群前半
- 第Ⅵ群土器…条痕文系土器群後半
- 第Ⅶ群土器…前期前半の土器群
- 第Ⅷ群土器…前期後半の土器群
- 第Ⅸ群土器…中期の土器群
- 第Ⅹ群土器…後期の土器群
- 第Ⅺ群土器…晚期の土器群

各土器群の詳細な分類は遺跡ごとにおいて行うこととした。また、各遺跡における群別は共通するが、類別は共通しないことをあらかじめことわっておきたい。

4. 本遺跡群より出土した土器の色調観察は、すべて農林省農林水産技術会議事務所監修「新版標準土色帳」—1976によった。

目 次

序

例 言

凡 例

I	調査に至るまでの経過	1
II	調査の方法と年度経過	5
III	遺跡群の立地と環境	6
IV	明花向遺跡A区の調査	
1	地区の概観と調査経過	11
2	先土器時代の遺構と遺物	14
(1)	第IV層の遺構と遺物	14
(2)	第Ⅲ・Ⅳ層の遺構と遺物	14
3	縄文時代の遺構と遺物	44
(1)	竪穴状遺構 (S B-1・2)	44
(2)	炉穴 (S F-1~6)	47
(3)	土壙 (S K-1~14)	52
(4)	遺構出土の土器	61
(5)	グリッド出土の土器	72
(6)	石器	81
4	弥生時代の遺構と遺物	83
(1)	住居跡 (S I-1)	83
(2)	方形周溝墓 (S Z-1・2)	90
(3)	溝 (S D-1)	97
(4)	グリッド出土の遺物	102
5	近世の遺構と遺物	104
(1)	土壙 (S K-15)	104
(2)	墓壙 (S T-1~17)	106

V 明花向遺跡B区の調査

1 地区の概観と調査経過	115
2 繩文時代の遺構と遺物	118
(1) 住居跡 (S I-1)	118
(2) 炉穴 (S F-1~6)	118
(3) 土墳 (S K-1~4)	138
(4) 遺構出土の土器	145
(5) グリッド出土の土器	153
(6) 石 器	179
3 弥生時代の遺構と遺物	187
(1) 住居跡 (S I-2~10)	187
(2) 方形周溝墓 (S Z-1)	236
(3) グリッド出土の遺物	240
4 中世の遺構と遺物	242
(1) 竪穴状遺構 (S B-1・2)	242
(2) 墓塚 (S T-1~19)	244
(3) グリッド出土の遺物	249

VI 明花向遺跡C区の調査

1 地区の概観と調査経過	250
2 先土器時代の遺構と遺物	254
(1) 第IV層の遺構と遺物	254
1 繩文時代の遺構と遺物	305
(1) 住居跡 (S I-1)	305
(2) 炉穴 (S F-1~10)	306
(3) 土墳 (S K-1~21)	325
(4) 遺構出土の土器	343
(5) グリッド出土の土器	360
(6) 石 器	376

VII 明花上ノ台遺跡の調査

1 遺跡の概観と調査経過	377
--------------	-----

2 縄文時代の遺構と遺物	379
(1) 住居跡 (S I-1)	379
(2) 炉穴 (S F-1・2)	382
(3) 土壙 (SK-1~8)	383
(4) 遺構出土の土器	389
(5) グリッド出土の土器	399
(6) 石 器	409

VIII 井沼方馬堤遺跡の調査

1 遺跡の概観と調査経過	411
2 先土器時代の遺構と遺物	413
(1) 第IV・V層の遺構と遺物	413
3 縄文時代の遺構と遺物	426
(1) 炉穴 (S F-1~10)	426
(2) 土壙 (SK-1~3)	431
(3) 遺構出土の土器	434
(4) グリッド出土の土器	435
(5) 石 器	439

IX とうのこし遺跡の調査

1 遺跡の概観と調査経過	442
2 縄文時代の出土遺物	443

X 結 語

1 先土器時代	446
2 縄文時代	453
3 弥生時代	476

XI 附 編

1 明花向遺跡A区花粉・鉱物分析	487
2 各遺跡出土土器胎土分析	493
3 明花向遺跡B区 ¹⁴ C年代測定	505

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡群の位置と座標原点	6
第 2 図 周辺の主な遺跡	7
第 3 図 各遺跡の位置	10
第 4 図 明花向遺跡 A 区先土器時代調査区	11
第 5 図 明花向遺跡 A 区層序	12
第 6 図 石器・礫・炭化物分布	15・16
第 7 図 先土器時代遺物分布(1)	17
第 8 図 先土器時代遺物分布(2)	18
第 9 図 先土器時代遺物分布(3)	19
第 10 図 母岩剥分布・接合図	21・22
第 11 図 第 IV・V・VI・VII・VIII・IX 層の石器	24
第 12 図 安山岩母岩 1 の接合例(1)	25
第 13 図 安山岩母岩 1 の接合例(2)	26
第 14 図 安山岩母岩 1 の接合例(3)	27
第 15 図 安山岩母岩 2 の接合例(1)	28
第 16 図 安山岩母岩 2 の接合例(2)	29
第 17 図 安山岩母岩 2 の接合例(3)	30
第 18 図 チャート母岩 1 の接合例 1(1)	31
第 19 図 チャート母岩 1 の接合例 1(2)	32
第 20 図 チャート母岩 1 の接合例 2(1)	33
第 21 図 チャート母岩 1 の接合例 2(2)	34
第 22 図 チャート母岩 1 の接合例 2・3	35
第 23 図 第 1 号竪穴状造構(SB-1)	45
第 24 図 第 2 号竪穴状造構(SB-2)	46
第 25 図 第 1・2・3 号炉穴(SF-1・2・3)	48
第 26 図 第 4 号炉穴(SF-4)	49
第 27 図 第 5・6 号炉穴(SF-5・6) 第 12 号土壙(SK-12)	51
第 28 図 第 1・2・3・4 号土壙 (SK-1・2・3・4)	53
第 29 図 第 5・6・7・8 号土壙 (SK-5・6・7・8)	55
第 30 図 第 9・10・11 号土壙 (SK-9・10・11)	56
第 31 図 第 13・14 号土壙(SK-13・14)	59
第 32 図 造構出土土器(1)	62
第 33 図 造構出土土器(2)	64
第 34 図 造構出土土器(3)	65
第 35 図 造構出土土器実測図(1)	66
第 36 図 造構出土土器実測図(2)	67
第 37 図 造構出土土器実測図(3)	68
第 38 図 造構出土土器実測図(4)	69
第 39 図 造構出土土器実測図(5)	70
第 40 図 グリッド出土土器(1)	73
第 41 図 グリッド出土土器(2)	75
第 42 図 グリッド出土土器(3)	76
第 43 図 グリッド出土土器(4)	77
第 44 図 グリッド出土土器(5)	79
第 45 図 石器(1)	82
第 46 図 石器(2)	82
第 47 図 第 1 号住居跡(SI-1)	84
第 48 図 第 1 号住居跡遺物分布状態	85
第 49 図 第 1 号住居跡出土遺物(1)	87
第 50 図 第 1 号住居跡出土遺物(2)	88
第 51 図 第 1 号方形周溝墓(SZ-1)(1)	91・92
第 52 図 第 1 号方形周溝墓(SZ-1)(2)	93
第 53 図 第 1 号方形周溝墓北溝遺物出土状態	94
第 54 図 第 1 号方形周溝墓出土遺物(1)	94
第 55 図 第 1 号方形周溝墓出土遺物(2)	95
第 56 図 第 2 号方形周溝墓(SZ-2)	96
第 57 図 第 1 号溝(SD-1)	98
第 58 図 第 1 号溝遺物分布状態	99
第 59 図 第 1 号溝出土遺物(1)	100
第 60 図 第 1 号溝出土遺物(2)	101
第 61 図 グリッド出土遺物(1)	103
第 62 図 グリッド出土遺物(2)	103
第 63 図 第 15 号土壙(SK-15)	104
第 64 図 第 15 号土壙出土遺物	105
第 65 図 第 1・2・3・8・9・10・11 号 土壙(ST-1・2・3・8・9・10・11)	107
第 66 図 第 4・5・6・7・12・13 号墓壙 (ST-4・5・6・7・12・13)	112
第 67 図 第 14・15・16・17 号墓壙 (ST-14・15・16・17)	109
第 68 図 第 3・4・6・17 号墓壙出土遺物	114
第 69 図 明花向遺跡 B 区先土器時代調査区	115
第 70 図 明花向遺跡 B 区層序	116
第 71 図 第 1 号住居跡(SI-1)	119
第 72 図 第 1 号炉穴(SF-1)(1)	121・122
第 73 図 第 1 号炉穴(SF-1)(2)	123・124
第 74 図 第 1 号炉穴新旧関係	125・126

第 75 図	第1号炉穴焼土範囲 及び遺物分布状態	127・128
第 76 図	第2・3・4号炉穴 (S F-2・3・4)	135
第 77 図	第5・6号炉穴 (S F-5・6)	137
第 78 図	第1・4号土壙 (SK-1・4)	140
第 79 図	第2号土壙 (SK-2)	142
第 80 図	第3号土壙 (SK-3)	143
第 81 図	第1号住居跡出土土器	146
第 82 図	造構出土土器(1)	147
第 83 図	造構出土土器(2)	148
第 84 図	造構出土土器(3)	150
第 85 図	造構出土土器(4)	151
第 86 図	造構出土土器実測図	152
第 87 図	グリッド出土土器(1)第I群	155
第 88 図	グリッド出土土器(2)第I群	156
第 89 図	グリッド出土土器(3)第I群	157
第 90 図	グリッド出土土器(4)第I群	160
第 91 図	グリッド出土土器(5)第I群	162
第 92 図	グリッド出土土器(6)第III群	164
第 93 図	グリッド出土土器(7)第IV群 第V群	165
第 94 図	グリッド出土土器(8)第V群	166
第 95 図	グリッド出土土器(9)第V群	170
第 96 図	グリッド出土土器(10)第V群	173
第 97 図	グリッド出土土器(11)第V群	174
第 98 図	グリッド出土土器(12)第V群	175
第 99 図	グリッド出土土器(13)第V群～ 第X群	176
第100図	土製品実測図	178
第101図	石器(1)	180
第102図	石器(2)	181
第103図	石器(3)	182
第104図	石器(4)	183
第105図	石器(5)	184
第106図	石器(6)	185
第107図	第2号住居跡 (S I-2) (1)	188
第108図	第2号住居跡 (S I-2) (2)	189
第109図	第2号住居跡遺物分布状態	190
第110図	第2号住居跡遺物出土状態	191
第111図	第2号住居跡出土遺物(1)	193
第112図	第2号住居跡出土遺物(2)	194
第113図	第2号住居跡出土遺物(3)	195
第114図	第3・4号住居跡 (S I-3・4)	197
第115図	第3・4号住居跡遺物分布状態	199
第116図	第3号住居跡 (S I-3)	199
第117図	第4号住居跡 (S I-4)	201
第118図	第3・4号住居跡遺物出土状態	203
第119図	第3・4号住居跡出土遺物(1)	205
第120図	第3・4号住居跡出土遺物(2)	206
第121図	第3・4号住居跡出土遺物(3)	207
第122図	第5号住居跡 (S I-5) (1)	209
第123図	第5号住居跡 (S I-5) (2)	210
第124図	第5号住居跡分布状態	211
第125図	第5号住居跡遺物出土状態	212
第126図	第5号住居跡出土遺物(1)	214
第127図	第5号住居跡出土遺物(2)	215
第128図	第5号住居跡出土遺物(3)	216
第129図	第6号住居跡 (S I-6)	218
第130図	第6号住居跡遺物分布状態	219
第131図	第6号住居跡出土遺物	220
第132図	第7号住居跡 (S I-7) (1)	221
第133図	第7号住居跡 (S I-7) (2)	222
第134図	第7号住居跡遺物分布・出土状態	223
第135図	第7号住居跡出土遺物(1)	225
第136図	第7号住居跡出土遺物(2)	226
第137図	第8号住居跡 (S I-8)	227
第138図	第8号住居跡遺物分布状態	228
第139図	第8・9号住居跡出土遺物(1)	228
第140図	第8・9号住居跡出土遺物(2)	229
第141図	第9号住居跡 (S I-9)	230
第142図	第10号住居跡 (S I-10)	231
第143図	第10号住居跡遺物出土状態	232
第144図	第10号住居跡出土遺物(1)	234
第145図	第10号住居跡出土遺物(2)	235
第146図	第1号方形周溝墓 (S Z-1) (1)	236
第147図	第1号方形周溝墓 (S Z-1) (2)	238
第148図	第1号方形周溝墓 (S Z-1) (3)	239
第149図	第1号方形周溝墓 グリッド出土遺物	241
第150図	第1・2号堅穴状造構 (S B-1・2)	243
第151図	墓墳群 (ST-1~19) (1)	245・246
第152図	墓墳群 (ST-1~19) (2)	247
第153図	グリッド出土遺物	249
第154図	明花向遺跡C区先土器時代調査区	250
第155図	明花向遺跡C区層序	251
第156図	石器・礫・炭化物分布	255・256
第157図	先土器時代遺物分布(1)	257
第158図	先土器時代遺物分布(2)	258

第 159 図	先土器時代遺物分布(3).....	259
第 160 図	先土器時代遺物分布(4).....	260
第 161 図	先土器時代遺物分布(5).....	261
第 162 図	石器・礫接合図.....	263・264
第 163 図	第IV層の石器(1).....	265
第 164 図	第IV層の石器(2).....	266
第 165 図	第IV層の石器(3).....	267
第 166 図	第IV層の石器(4).....	269
第 167 図	第IV層の石器(5).....	270
第 168 図	第IV層の石器(6).....	271
第 169 図	第IV層の石器(7).....	272
第 170 図	第IV層の石器(8).....	273
第 171 図	第IV層の石器(9).....	274
第 172 図	第IV層の石器鉗.....	275
第 173 図	第IV層の石器接合例 1	276
第 174 図	第IV層の石器接合例 2	277
第 175 図	第IV層の石器接合例 3	278
第 176 図	第IV層の石器接合例 4	279
第 177 図	第 1 号住居跡 (S I - 1)	305
第 178 図	第 1 号炉穴 (S F - 1)	307
第 179 図	第 2 号炉穴 (S F - 2)	309
第 180 図	第 3 号炉穴 (S F - 3)	312
第 181 図	第 4 号炉穴 (S F - 4)	313
第 182 図	第 5 号炉穴 (S F - 5) 第14号土壤 (SK-14)	315
第 183 図	第 6 号炉穴 (S F - 6)	316
第 184 図	第 7 号炉穴 (S F - 7) (1).....	317
第 185 図	第 7 号炉穴 (S F - 7) (2).....	318
第 186 図	第 8 号炉穴 (S F - 8)	321
第 187 図	第 9・10号炉穴 (S F - 9・10)	323
第 188 図	第 1・2号土壤 (SK-1・2)	326
第 189 図	第 3 号土壤 (SK-3)	327
第 190 図	第 4 号土壤 (SK-4)	328
第 191 図	第 5 号土壤 (SK-5)	330
第 192 図	第 6・7号土壤 (SK-6・7)	331
第 193 図	第 8・9・10号土壤 (SK-8・9・10)	333
第 194 図	第11・12・13・15号土壤 (SK-11・12・13・15)	335
第 195 図	第16・17号土壤 (SK-16・17)	337
第 196 図	第18・19・20号土壤 (SK-18・19・20)	339
第 197 図	第21号土壤 (SK-21)	341
第 198 図	第 1 号住居跡出土土器.....	343
第 199 図	造構出土土器(1).....	345
第 200 図	造構出土土器(2).....	347
第 201 図	造構出土土器(3).....	349
第 202 図	造構出土土器(4).....	351
第 203 図	造構出土土器実測図(1).....	352
第 204 図	造構出土土器実測図(2).....	353
第 205 図	造構出土土器実測図(3).....	354
第 206 図	造構出土土器実測図(4).....	355
第 207 図	造構出土土器実測図(5).....	356
第 208 図	造構出土土器実測図(6).....	357
第 209 図	造構出土土器実測図(7).....	358
第 210 図	造構出土土器実測図(8).....	359
第 211 図	グリッド出土土器(1)	
	第 I 群・第 II 群.....	361
第 212 図	グリッド出土土器(2)	
	第 III 群・第 IV 群.....	362
第 213 図	グリッド出土土器(3)第 V 群.....	365
第 214 図	グリッド出土土器(4)第 V 群.....	369
第 215 図	グリッド出土土器(5)	
	第 V 群・第 VI 群.....	370
第 216 図	グリッド出土土器(6)第 VI 群.....	372
第 217 図	グリッド出土土器(7)	
	第 VII 群～第 XI 群.....	374
第 218 図	土製品・石器(1).....	375
第 219 図	石器(2).....	375
第 220 図	明花上ノ台遺跡先土器時代調査区.....	377
第 221 図	明花上ノ台遺跡層序.....	378
第 222 図	第 1 号住居跡 (S I - 1)	380
第 223 図	第 1 号住居跡遺物分布状態.....	381
第 224 図	第 1・2 号炉穴 (S F - 1・2)	382
第 225 図	第 1・2 号土壤 (SK-1・2)	384
第 226 図	第 3・4・5 号土壤 (SK-3・4・5)	386
第 227 図	第 6・7・8 号土壤 (SK-6・7・8)	387
第 228 図	第 1 号住居跡出土土器(1).....	390
第 229 図	第 1 号住居跡出土土器(2).....	391
第 230 図	第 1 号住居跡出土土器(3).....	392
第 231 図	第 1 号住居跡出土土器実測図.....	393
第 232 図	造構出土土器(1).....	395
第 233 図	造構出土土器(2).....	397
第 234 図	造構出土土器実測図.....	398
第 235 図	グリッド出土土器(1)	
	第 I 群・第 V 群.....	401
第 236 図	グリッド出土土器(2)第 V 群.....	402
第 237 図	グリッド出土土器(3)第 V 群.....	403

第238図	グリッド出土土器(4)第V群	405	第254図	第1・3号土壙(SK-1・3)	431
第239図	グリッド出土土器(5)第V群	406	第255図	第2号土壙(SK-2)	432
第240図	グリッド出土土器(6) 第VI群・第IX群	408	第256図	遺構出土土器	434
第241図	石器(1)	410	第257図	グリッド出土土器(1)	
第242図	石器(2)	410	第258図	グリッド出土土器(2)	436
第243図	井沼方馬提遺跡先土器時代調査区	411	第259図	石器(1)	438
第243図	井沼方馬提遺跡層序	412	第260図	石器(2)	440
第244図	石器・礫・炭化物分布	415・416	第261図	とうのこし遺跡	441
第246図	先土器時代遺物分布(1)	417	第262図	グリッド出土物	443
第247図	先土器時代遺物分布(2)	418	第263図	大宮台地の先土器時代遺跡と層位	448
第248図	先土器時代遺物分布(3)	419	第264図	大宮台地の先土器時代遺跡(1)	450
第249図	第IV～V層の石器(1)	420	第265図	大宮台地の先土器時代遺跡(2)	451
第250図	第IV～V層の石器(2)	421	第266図	口唇部形態変遷模式図	460
第251図	第IV～V層の石器接合例	422	第267図	野島式土器段階変遷図	471
第252図	第1・2・3・4・6号炉穴 (S F-1・2・3・4・6)	427	第268図	官ノ台式土器段階比較	477
第253図	第5・7・8・9・10号炉穴 (S F-5・7・8・9・10)	429			

附　　目　　次

附図1	明花向遺跡A区遺構位置図
附図2	明花向遺跡B区遺構位置図
附図3	明花向遺跡C区遺構位置図
附図4	明花上ノ台遺跡遺構位置図
附図5	井沼方馬提遺跡遺構位置図
附図6	とうのこし遺跡遺構位置図

表　　目　　次

第1表	明花向遺跡A区先土器時代石器一覧表	36～41
第2表	明花向遺跡A区先土器時代礫一覧表	42～43
第3表	明花向遺跡A区縄文時代炉穴一覧表	52
第4表	明花向遺跡A区縄文時代土壙一覧表	60
第5表	明花向遺跡A区近世墓塚一覧表	60
第6表	明花向遺跡B区縄文時代炉穴一覧表	139
第7表	明花向遺跡B区縄文時代土壙一覧表	144
第8表	明花向遺跡B区弥生時代住居跡一覧表	235
第9表	明花向遺跡B区中世墓塚一覧表	249
第10表	明花向遺跡C区先土器時代石器一覧表	280～288
第11表	明花向遺跡C区土器時代礫一覧表	289～304
第12表	明花向遺跡C区縄文時代炉穴一覧表	324
第13表	明花向遺跡C区縄文時代土壙一覧表	342
第14表	明花上ノ台遺跡縄文時代炉穴一覧表	388
第15表	明花上ノ台遺跡縄文時代土壙一覧表	388

第16表	井沼方馬堤遺跡先土器時代石器一覧表	414
第17表	井沼方馬堤遺跡先土器時代縄文一覧表	423~425
第18表	井沼方馬堤遺跡縄文時代炉穴一覧表	433
第19表	井沼方馬堤遺跡縄文時代土墳一覧表	433
第20表	縄文時代石器・土製品一覧表	444・445

図 版 目 次

明花向遺跡A区		
図版 1	M-6-17・22グリッド遺物出土状態	第1号住居跡出土土器
	M-5-25グリッド遺物出土状態	図版23 造構出土土器(1)
図版 2	先土器時代調査風景	図版24 造構出土土器(2)
	M-6-16グリッド遺物出土状態	図版25 グリッド出土土器(1)
図版 3	先土器時代の石器	図版26 グリッド出土土器(2)
図版 4	第1号窓穴状造構	図版27 グリッド出土土器(3)
	第2号炉穴	図版28 グリッド出土土器(4)
図版 5	第2号炉穴遺物出土状態	図版29 グリッド出土土器(5)
	第3号炉穴	図版30 グリッド出土土器(6)・土製品
図版 6	第5号炉穴・第12号土壤	図版31 石器(1)
	第6号炉穴	図版32 石器(2)
図版 7	造構出土土器(1)	図版33 第2号住居跡
図版 8	造構出土土器(2)	第2号住居跡遺物出土状態
図版 9	造構出土土器(3)	図版34 第3・4号住居跡
図版10	グリッド出土土器(1)	第3号住居跡遺物出土状態
図版11	グリッド出土土器(2)・石器	図版35 第5号住居跡
図版12	第1号住居跡	第5号住居跡遺物出土状態
	第1号方形周溝墓	図版36 第6号住居跡
図版13	第2号方形周溝墓	第7号住居跡
	第1号溝	図版37 第7号住居跡遺物出土状態
図版14	第1号住居跡出土遺物(1)	第10号住居跡遺物出土状態
図版15	第1号住居跡出土遺物(2)	図版38 住居跡細部・第1号方形周溝墓
図版16	第1号方形周溝墓・第1号溝・グリッド出土遺物	図版39 第2号住居跡出土遺物(1)
図版17	第1号住居跡・グリッド出土遺物	図版40 第2号住居跡出土遺物(2)
	第1号溝・グリッド出土遺物	図版41 第2号住居跡出土遺物(3)
明花向遺跡B区		第2・3・4号住居跡出土遺物
図版18	調査区遠景	図版42 第3・4号住居跡出土遺物
	第1号住居跡	図版43 第5号住居跡出土遺物(1)
図版19	第1号炉穴	図版44 第5(2)・6号住居跡出土遺物
	第1号炉穴(部分)	図版45 第5号住居跡出土遺物(3)
図版20	第1号炉穴土製品出土状態	第7号住居跡出土遺物
	第2号土壤	図版46 第7・8号住居跡出土遺物
図版21	第1・2・4号炉穴・第4号土壤	図版47 第10号住居跡出土遺物(1)
図版22	第1号土壤出土土器	図版48 第10号住居跡出土遺物(2)
		図版49 第1号方形周溝墓・グリッド出土遺物
		グリッド出土遺物(古鏡・銅鏡)

- 明花向遺跡C区
- 図版50 調査区遠景
- 先土器時代礫群
- 図版51 D—7—21グリッド遺物出土状態
D—7—6グリッド遺物出土状態
- 図版52 先土器時代の石器(1)
- 図版53 先土器時代の石器(2)
- 図版54 先土器時代の石器(3)
- 図版55 先土器時代の石器(4)
- 図版56 第1号住居跡
第1号炉穴
- 図版57 第2号炉穴
第4号炉穴
- 図版58 第6号炉穴
第8号炉穴
- 図版59 第7号炉穴
第2号土壙
第4号土壙
- 図版60 造構出土土器(1)
- 図版61 造構出土土器(2)
- 図版62 造構出土土器(3)
- 図版63 造構出土土器(4)
- 図版64 造構出土土器(5)
- 図版65 造構出土土器(6)
- グリッド出土土器(1)
- 図版66 グリッド出土土器(2)
- 図版67 グリッド出土土器(3)
- 図版68 グリッド出土土器(4)
- 図版69 グリッド出土土器(5)
石器及び土製品
- 明花上ノ台遺跡
- 図版70 第1号住居跡
第2号土壤遺物出土状態
- 図版71 出土土器(1)
- 図版72 出土土器(2)
石器
- 図版73 第1号住居跡出土土器(1)
- 図版74 第1号住居跡出土土器(2)
造構出土土器(1)
- 図版75 造構出土土器(2)
グリッド出土土器(1)
- 図版76 グリッド出土土器(2)
井沼方馬場遺跡
- 図版77 D—2—20グリッド遺物出土状態
先土器時代の石器
- 図版78 グリッド出土土器
石器
- 図版79 文様抽出手法拡大図(1)
- 図版80 文様抽出手法拡大図(1)
- 図版81 文様抽出手法拡大図(3)

I 調査に至るまでの経過

首都圏に位置する埼玉県は人口の増加が著しく、それに対応するため日本住宅公団を中心とする住宅政策および地域整備が進められている。浦和市大谷口地区について住宅公団により区画整理方式による宅地開発事業が計画された。

住宅公団では文化庁との間で取りかわした『日本住宅公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書』に基づき、埼玉県教育委員会へ「浦和大谷口地区における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会した。

県教育委員会では現地調査を実施した後、昭和51年5月19日付教文第105号をもって大旨下記のとおり回答した。

1. 地区内には绳文～古墳時代の遺跡6箇所（№1～№6 遺跡）が所在すること。
2. これらの遺跡は現状保存することが望ましいが、やむを得ず現状を変更する場合には、事前に記録保存の発掘調査を実施すること。

その後、住宅公団から昭和52年3月28日付け、第41-374をもって「浦和大谷口地区における埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて」協議がなされた。住宅公団と県教育委員会では協議を重ねた結果、昭和54年度から県教育委員会が直営で発掘調査を実施することを決定した。

文化財保護法に基づき、住宅公団からは埋蔵文化財発掘通知、県教育委員会からは埋蔵文化財発掘調査通知を文化庁長官へ提出し、昭和54年6月より№3 遺跡の発掘調査を開始した。昭和55年度からは埼玉県埋蔵文化財調査事業団に調査が引き継がれ、昭和57年度まで調査を実施した。

文化庁からは、各遺跡について次のとおり発掘調査通知または調査届を受理した旨の通知があった。

（宮崎朝雄）

No	遺跡名	所在地	時代	種別	文化庁受理番号	備考
№1	明花向A区	浦和市大谷口字明花	绳文 弥生	集落跡	55. 5. 20委保第5の1562号	本報告書
2	〃B区	〃 大谷口字向	〃	〃	57. 3. 23委保第5の222号	
3	〃C区	〃 大谷口字向	〃	〃	54. 11. 12委保第22-1038号	
4	井沼方馬堤	〃 井沼方字馬堤	〃	〃	56. 5. 12委保第5の1330号	
5	とうのこし	〃 大谷口字向	〃	〃	56. 5. 28委保第5の2008号	
6	明花上ノ台	〃 大谷口字明花	〃	〃	56. 5. 12委保第5の1277号	

発掘調査の組織

1. 発掘（昭和54年度）

主 体 者 埼玉県教育委員会

教 育 長 石 田 正 利

事 務 局 埼玉県教育局文化財保護課

課 長 杉 山 泰 之

課長補佐(兼)庶務係長 奥 泉 信

課 長 补 佐 木 戸 一 恵

庶 務 経 理 埼玉県教育局文化財保護課

庶 務 係 持 田 ま り 子

畔 上 敦 志

太 田 和 夫

千 村 修 平

企 画 調 整 埼玉県教育局文化財保護課

文化財第二係長 栗 原 文 藏

柿 沼 幹 夫

駒 宮 史 朗

井 上 尚 明

横 川 好 富

大 和 修

市 川 修

利 根 川 章 彦

(非常勤職員) 劍 持 和 夫

2. 発掘（昭和55年度）

主 体 者 勘埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 関 根 秋 夫

副 理 事 長 本 郷 春 治

常 務 理 事 渡 辺 澄 夫

庶 務 経 理 勘埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管 理 部 長 伊 藤 悅 光

閑 野 栄 一

発 掘 勘埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調 査 研 究 部 長 横 川 好 富

調 査 研 究 第 二 課 長 小 久 保 敬

市 川 修

劍 持 和 夫

金 子 直 行

3. 発掘（昭和56年度）

主 体 者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 長 井 五 郎

(前) 関 根 秋 夫

副 理 事 長 沼 尻 和 也

(前) 木 郷 春 治

常 務 理 事 渡 辺 澄 光

管 理 部 長 伊 藤 悅 光

関 野 栄 一

福 田 浩

本 庄 朗 人

横 川 好 富

小 久 保 徹

劍 持 和 夫

佐 藤 典 邦

庶務經理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

発 掘 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長

調査研究第二課長

4. 発掘及び整理（昭和57年度）

主 体 者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 長 井 五 郎

副 理 事 長 岩 上 進

(前) 沼 尻 和 也

常 務 理 事 渡 辺 澄 夫

管 理 部 長 佐 野 長 二

関 野 栄 一

江 田 和 美

福 田 啓 子

福 田 浩

本 庄 朗 人

横 川 好 富

庶務經理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

発掘・整理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長

調査研究副部長(兼)調査研究第五課長

調査研究第二課長

小 久 保 徹

劍 持 和 夫

佐 藤 典 邦

金 子 直 行

5. 整理（昭和58年）

主 体 者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 長 井 五 郎

副 理 事 長 岩 上 進

常 務 理 事 石 川 正 美

庶務經理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長 佐野長二

関野栄一

江田和美

福田啓子

福田浩

本庄朝人

横川好富

整 理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長 小川良祐

調査研究副部長 今泉泰之

調査研究第四課長 田中英司

郷持和夫

金子直行

6. 協力者 浦和市教育委員会及び地元関係者各位

II 調査の方法と年度経過

調査の方法

本遺跡群の調査は開発事業に伴う記録保存措置である。このため各遺跡・遺構・遺物について、その位置をより正確に記録することはいうまでもない。現地調査を開始するにあたってはこのことを念頭に置き、国家基準に基づいたグリッド（方眼）による測量法を採用した。

グリッド設定の手順は以下のとおりである。

1. 平面直角座標第Ⅹ系（原点：北緯36度00分00秒、東經139度50分00秒。但し原点座標値はX = 0.000m、Y = 0.000m。）に基づく。
2. 上記座標より各遺跡調査区内に20m 方眼を設定し、その各交点に基準杭を打設する。（但し、原点から各杭への座標値はX・Yともに20mの倍数とする）。
3. 上記2の20×20mを大グリッドとし、各グリッドの呼称は北西端より南へアルファベット、東へ数字で表わす。（附図参照）
4. 上記3の大グリッド内はさらに4×4 mの小グリッドに各25分割する。（附図参照）
5. 水準点（杭）は水準原点（東京湾の平均海面）より求める。

専尚、以上の現地作業は調査員と協議のうえ、中央航業株式会社が実施した。

発掘調査は上記4を基本単位として実施したが、各遺構についてはこれを優先させた。遺跡測量もグリッドに基づいて用紙を割り付けし、これを大グリッド単位に順次記録した。

年 度 経 過

（昭和54年度） 埼玉県教育委員会により、昭和54年6月に明花向遺跡C区の調査が開始される。縄文時代早期の各遺構、及び先土器時代の確認調査を実施し、翌年3月末までに地区全体の3分の1程を終了する。

（昭和55年度） 本年度をもって財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発足し、これが以後の調査を継続することとなる。同年7月、住宅・都市整備公団の事業進行上から一時C区の調査を中断し、明花向遺跡A区へ移動する。A区で先土器・縄文・弥生時代の貴重な資料検出をへ、11月に同区終了と同時にC区へ復帰する。翌昭和56年3月には先土器・縄文時代等の遺構・遺物について、そのすべての調査を終える。

（昭和56年度） 本年度は縄文時代早期を中心とする明花上ノ台遺跡の調査から開始し、5月には同遺跡終了をもって井沼方馬堤遺跡へと移動する。11月までに先土器時代の調査を終え、ただちに明花向遺跡B区の調査に着手する。

（昭和57年度） 引き続きB区の調査を実施し、縄文・弥生時代について多大の資料を得る。8月に同区を終了し、機材の移動とともにとうのこし遺跡の調査へ赴く。昭和57年9月に同遺跡を終了。これをもって本遺跡群調査地のすべてについて、その現地調査を完了する。10月より整理作業開始。

（昭和58年度） 整理作業を継続実施し、昭和59年3月に本書刊行となる。

III 遺跡群の立地と環境

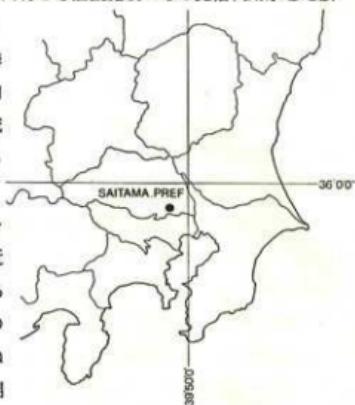
明花向遺跡・明花上ノ台遺跡・井沼方馬堤遺跡・とうのこし遺跡は、およそ北緯 $35^{\circ}51'$ 東経 $139^{\circ}42'$ 付近の浦和市東南端に位置する。このうち明花向遺跡は、南の川口市とは見沼代用水西線をもって境を接しており、国鉄武蔵野線東浦和駅からは南西へ約1.3kmを隔てている。明花向遺跡を基点とすれば、その西方約0.4kmに明花上ノ台遺跡、北方約0.7kmに井沼方馬堤遺跡、また、北西へ約0.7kmにとうのこし遺跡がそれぞれ分布している(第3図)。なお、各遺跡の所在地番は以下のとおりである。

- | | |
|---------|----------------|
| 明花向遺跡A区 | 浦和市大谷口字明花2060他 |
| 明花向遺跡B区 | 浦和市大谷口字向2204他 |
| 明花向遺跡C区 | 浦和市大谷口字向2234他 |
| 明花上ノ台遺跡 | 大谷口字明花1880他 |
| 井沼方馬堤遺跡 | 浦和市井沼方字馬堤413他 |
| とうのこし遺跡 | 浦和市大谷口字向2593他 |

浦和市は県庁所在地として、埼玉県内における行政・文化・教育等の中心的都市性を着実に発展させてきた。さらに近年にあっても、東北・上越新幹線建設、浦和駅前再開発、宅地化に伴う土地区画整理等々の大小各種開発事業は顕著であり、これにかかる急速な大都市化が進行している。本遺跡群周辺もその例外ではなく、畠地や雜木林は比較的多く見られるものの、大部分は既に宅地化されている。

江戸時代後期に編纂された「新編武蔵風土記稿」によれば、足立郡木崎領に属す大谷口村、および井沼方村の両村が本遺跡群の所在する地域にあたる。両村とも灌漑施設である見沼代用水と近接してはいるが、記事中には水利が不便で、雨水をたよりとして耕作を行い、旱魃をこうむるとある。これは西隣する円正寺村が「三沼代水流れれど、地高ければ村内に引沃ぐことをあたわざ」とあるのと同様、低地部を流れる用水が引けない場所、すなわち台地上の村落であることを窺わせるものである。

この台地は大宮台地と呼ばれ、第三紀の粘土・砂層を基盤とした洪積(ローム)台地である。北は鴻巣市付近より、南は浦和市・鳩ヶ谷市まで達なる細長い台地であり、同じ洪積台地である西の武蔵野台地とは荒川を、東の下総台地とは中川をもって隔離している。台地上は概ね平坦であるが、鴨川・荒川・綾瀬川・元荒川等の河川開拓により、大宮市付近でいくつかの支台地に分枝する。



第1図 遺跡群の位置と座標原点



- A. 明花向遺跡 B. 明花上ノ台遺跡 C. 井沼方馬堤遺跡 D. とうのこし遺跡 1. 南中丸遺跡 2. 南中野遺跡
 3. 緑ヶ谷公園遺跡 4. 錦山遺跡 5. 覚満寺遺跡 6. 国昌寺南遺跡 7. 中原遺跡 8. えんぎ山遺跡 9. 鶴巻遺跡
 10. 中原前遺跡 11. 大古里遺跡 12. 北宿遺跡 13. 馬場北遺跡 14. 前耕地遺跡 15. 前島遺跡 16. 駒前遺跡
 17. 松木遺跡 18. 芝原遺跡 19. 梅所遺跡 20. 大間木内谷遺跡 21. 大北遺跡 22. 西谷遺跡 23. 和田南遺跡
 24. 吉場遺跡 25. 東中尾遺跡 26. 井沼方遺跡 27. ツツ木遺跡 28. 小松原遺跡 29. 円正寺遺跡 30. ト伝貝塚

第2図 周辺の主な遺跡

本遺跡群を乗せる浦和支台は、鴻沼用水の支谷を挟んで西の与野支台と、また芝川を挟んで北の片柳支台、東の鳩ヶ谷支台とそれぞれ分断している。各支台の先端部では小支谷の発達が顕著であり、半島状の小台地が樹枝状に広がっている。

本遺跡群もこの複雑に入り組んだ台地の最先端部に分布しており、周辺での標高は約14m、低地部との比高8~9mを測る。このため、南面する奥東京湾と呼ばれる広大な沖積低地への展望は極めて良好であり、晴天時には東京新宿の高層ビル群、また西方へ目を転ずれば遙か富士山をも望むことができる。

人間活動の歴史は台地が複雑かつ連続と発達してきたうちに包括されており、その蓋然性を物語るかのように、台地上には各時代にわたる遺跡が濃密に分布している。

第2図には本遺跡群と時期的に関連する遺跡、すなわち、先土器時代・縄文時代早期・弥生時代中期および後期の主な遺跡を示した。

先土器時代遺跡の存在は表面採集等で早くより指摘されていたが、ローム層中からの確実な出土報告は1974~1975年に行われた大古里遺跡の調査まで待たねばならなかった。この後は松ノ木遺跡、馬場北遺跡、西谷遺跡などの調査例が増加し、いずれも多大な成果を挙げている。大宮台地全体を見た場合でも、その遺跡分布は本遺跡群周辺に集中する傾向を示し、先土器時代研究における重要な位置を占める地域といえよう。

縄文時代早期の撫糸文系土器は明花向遺跡B区でかなりまとまって出土しており、一部は住居跡に伴っている。古くは大宮市南中丸遺跡、浦和市東中尾遺跡、同えんぎ山遺跡などの検出例が知られているが、この他にも浦和市では松ノ木遺跡、駒前遺跡等で良好な資料が出土している。

条痕文系土器を出土する遺跡は広く分布し、先出の大古里遺跡をはじめ大北遺跡、和田北遺跡、大間木内谷遺跡、西谷遺跡、吉場遺跡、鶴巻遺跡等が挙げられる。いずれも遺構は炉穴を主体に構成され、大古里遺跡では85基、大北遺跡では40基の多くが検出されている。明花向遺跡B区においても37基が集中して設営されており、これらとともに大規模な分布形態としての関連性が注目される。

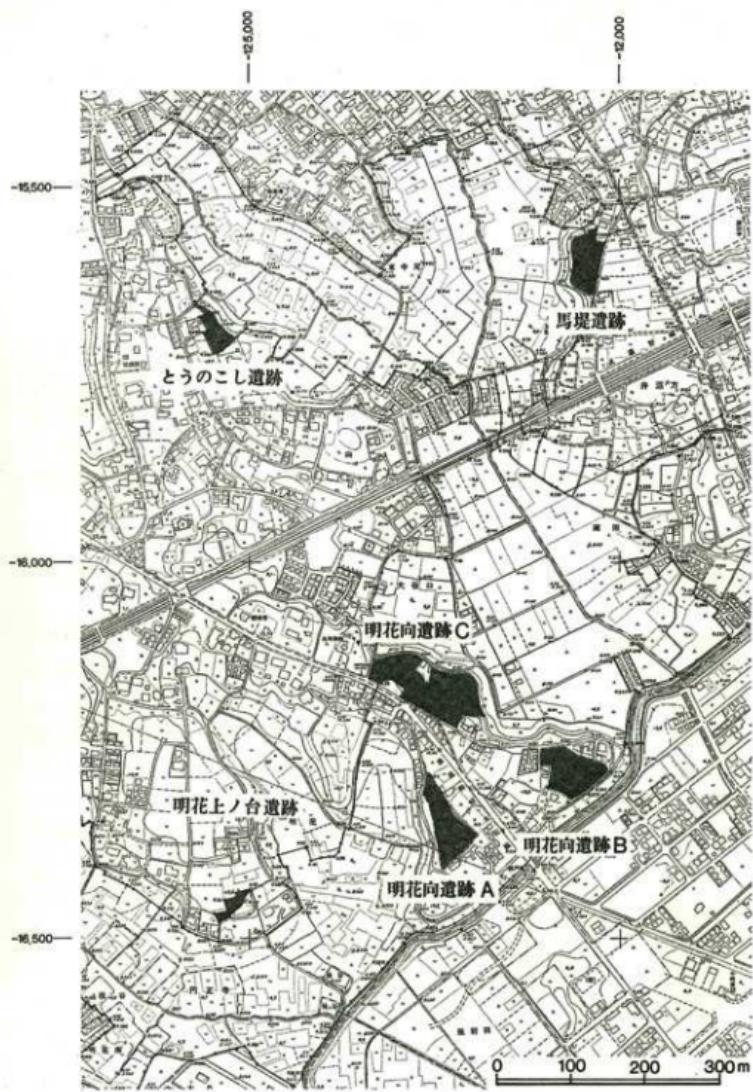
弥生時代では大宮市の南遺跡が須和田式期の集落として著名であるが、宮ノ台式期になると遺跡の分布は増加し、沖積平野を見下ろす台地南端部を中心に集落が営まれるようになる。これを西より見れば、一つ木遺跡、円正寺遺跡、明花向遺跡A区、同B区、大北遺跡、松ノ木遺跡という占地を窺うことができる。

以上、各時代の代表的な遺跡を列挙したにすぎないが、その地理的環境はここに広く存在する遺跡数に端的に示されているようである。「自然」という厳格な環境は、反面において計り知れない恩恵をもたらし続けており、ここに起居した人々がそれを享受していたであろうことは想像に難くない。

(飼持和夫)

参考文献

- 早川智明 1963 「大宮市南中丸遺跡第一次発掘調査報告書」大宮市教育委員会
- 柳田敏司 1963 「浦和市太庭円正寺遺跡発掘報」浦和市文化財の調査 第9集
- 三次国五郎・安岡路洋 1964 「東中尾」埼玉県立文化会館
- 三友国五郎・安岡路洋 1966 「稻荷原」
- 青木義脩ほか 1968 「明花遺跡」浦和市文化財調査委員会
- 吉川国男 1969 「浦和市井沼方遺跡」埼玉考古 第7号
- 安岡路洋 1969 「浦和市えんぎ山遺跡の調査」第2回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 柳田敏司・青木義脩・宮内正勝 1971 「馬場遺跡第二次調査報告」浦和市教育委員会
- 青木義脩・岩井重雄 1973 「鶴巣遺跡発掘調査報告」浦和市遺跡調査会報告書第6集
- 青木義脩 1974 「浦和市史 第1巻考古資料編」浦和市総務部市史編さん室
- 柳田敏司・青木義脩・高野博光 1976 「大古里遺跡発掘調査報告書」浦和市大古里遺跡調査会
- 青木義脩・高山清司 1976 「東北自動車道浦和市内遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会
- 高野博光・町田信他 1976 「大古里遺跡発掘調査報告書」浦和市大古里遺跡調査会
- 青木義脩・岩井重雄・小倉均 1980 「大間木内谷・和田西・吉場・井沼方遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書 第13集
- 宮崎朝雄他 1980 「ト伝」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第25集 埼玉県教育委員会
- 青木義脩・岩井重雄・小倉均 1981 「北大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書 第15集
- 青木義脩・高山清司 1981 「中原前・大古里遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第17集
- 青木義脩・小倉均 1983 「西谷・和田南・大北・大間木内谷遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書 第25集
- 青木義脩・高山清司・小倉均 1983 「北官・馬場北・馬場東・馬場・小室山遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書 第24集
- 蘆田伊人 「新編武藏風土記稿」 第7巻 雄山閣



第3図 各遺跡の位置

IV 明花向遺跡A区の調査

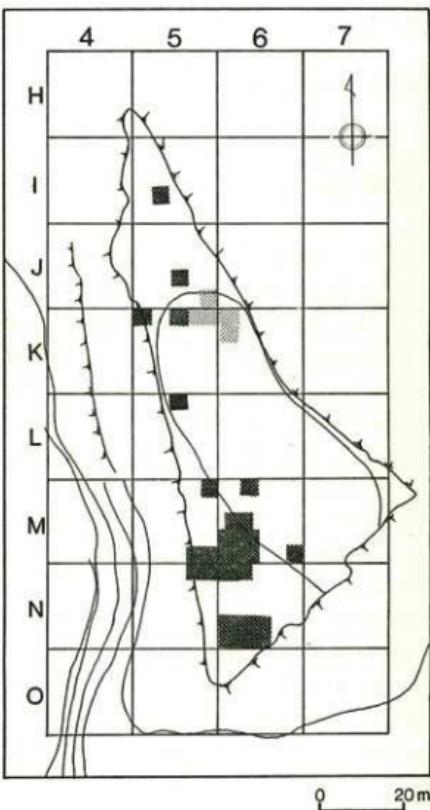
1. 地区の概観と調査経過

前章に述べたように、大宮台地各支台の南端部では樹枝状に小台地が入り組んでいるが、明花向遺跡もちょうど銀杏の葉が垂下したような形の台地上に営まれている。本遺跡の北端は極端に細くくびれており、独立丘的な感を強く受ける。この中央を南東から北西に県道柳崎・大宮線が貫き、台地をほぼ二分している。遺跡は道路を境に西側をA区、東側をB区、北側でややふくらんだ部分をC区とした。調査前はA・C区が畑地、B区が山林であり、いずれも沖積低地に面している。標高は平均13m、低地との比高7~8mを計る。地目や遺物散布から推して、遺構等の保存状態はかなり良好なものと思われたが、調査では3区とも表土下30~60cmに削平面（同時に遺構確認面となる）が検出された。このため造構によっては著しくそこなわれたものも見られた。おそらく、削平は台地上全体に及んでいるものと思われる。

調査の結果、A・C区の台地縁辺部でそれぞれ先土器時代の遺物集中、A・B区に弥生時代中期・後期の集落、3区全体に早期の炉穴を中心とした縄文時代の遺構が分布していることが判明した。

A区は県道の西側台地部分であるが、削平は一部ハードローム層にまで達している。このために削平以前の造構はプラの不明瞭なものも存在した。そのうえ、土砂採取等により台地肩部及び県道脇は急崖化しており、本来の地形復元すら困難な状態（三角形に孤立）であった。

本報告における各遺跡の層位は明花向遺跡のA区の層序区分を基本とする。詳細についてはC区の層位を参照されたい。

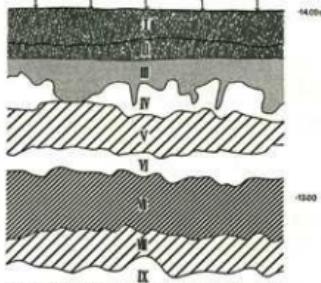


第4図 明花向遺跡A区先土器時代調査区

- 第Ⅰ層 暗茶褐色土層。再堆積土層であり、しまりなくバサつく。
- 第Ⅱ層 茶褐色土層。第Ⅰ層に準ずる再堆積土層であり、きめの粗い粒土で構成される。しまり・粘性ともに弱くバサバサである。
- 第Ⅲ層 淡黄褐色土層。いわゆるソフトローム層に相当する。調査以前の削平や近世にまでおよぶ造構の構築のため、上部を損失している場所がある。
- 第Ⅳ層 褐色土層。いわゆるハードローム層に相当する。第Ⅲ層との境界では凹凸を描き、ソフト化の進行している部分では堆積が薄い。
- 第Ⅴ層 暗褐色土層。第Ⅰ黑色帶にあたるものと思われるが、第Ⅱ黑色帶に比較すると黒味が薄い。
- 第Ⅵ層 褐色土層。先後の層に比較すると層厚は薄い。やや斑状の堆積となっている。
- 第Ⅶ層 黑褐色土層。第Ⅱ黑色帶の上部に相当すると思われる。明花向遺跡C区と同様に上部で黒味が強く、下部では薄い。
- 第Ⅷ層 暗褐色土層。第Ⅱ黑色帶の下部に相当するものと思われる。同層上部に比較して黒味に差があるため、区分は容易である。本遺跡の先土器時代資料は本層の下面から出土し始める。
- 第Ⅸ層 褐色土層。本遺跡の先土器時代資料は本層を中心として出土する。

検出された造構は、先土器時代の遺物集中4箇所、縄文時代早期の竪穴状造構2基、炉穴6基、土壙14基、弥生時代中期の住居跡1軒、方形周溝墓2基、環濠と思われるV字溝1条、近世墓壙8基、溝4条、土壙100余基他である。先土器時代の遺物集中と近世墓壙は調査区中央の西縁部に、縄文時代の造構は中央及びやや北よりに、弥生時代の造構は南縁にそってそれぞれ分布する傾向にある。上記のうち近世の溝および土壙は台地削平と概ね同時期の所産と思われるが、遺物はほとんど見られなかった。本報告書ではこれらを割愛するが、土壙はその平面形態及び土層状態から大きく二つのタイプに分類できる。一つは直径が50~60cm程で、深さ20~30cmを測る小形のものである。覆土にはしまりのないバサバサした茶褐色土を有している。いま一つは直径及び深さが1mを超える大形のものである。覆土にはゴツゴツしたローム塊を多く含む他、縄文・弥生時代の造構覆土と同様の黒褐色土がよく見られる。ただし、その堆積状態は不規則であり、自然堆積というよりも故意の埋めもどしを思わせる。前者はA区中央から南部全体に分布し、後者及び溝は北部に集中している。尚、表土一層で造構確認面となるため、グリッド出土の土器は小片かつ磨耗の激しいものであった。

調査は昭和55年7月6日にL-6グリッドより着手し、順次南へ向けて表土除去を行った。7月10日



第5図 明花向遺跡A区層序

に県道脇崩壊部の溝状造構底面に宮ノ台式の臺形土器を認める。7月28日に至りこれが同期の方形周溝墓であることを確認、さらに南側にもう1基を不完全な形ながらも検出する。8月13日よりA区北半の造構確認に着く。表土除去後ただちに縄文時代早期の土壌や堅穴状の落込みを検出した。しかし、該期造構の分布はさほど広からず、逆に近世の土壌と溝が濃密に分布する状態となる。8月21日には南西端で弥生時代中期の住居跡と切断されたV字溝を検出し、本調査区では宮ノ台式期の集落と墓域がセット関係にあることが明らかになった。おしむらくは、土砂採取により切り崩された部分に中心となるべき集落の存在が容易に想定されることである。これと併行して縄文時代早期の炉穴、土壌、近世墓壙の調査を実施する。10月30日までに遺跡の測量を終了し、10月22日に航空写真撮影を行う。10月22日より先土器時代の調査に入るが、早くも翌日にはM-7グリッド第Ⅰ黒色帯中より遺物が検出された。このグリッドを中心に周辺を精査したところ、第Ⅱ黒色帯下位に数多くの遺物を出土するに至った。さらにその広がりを把握するためにグリッドを拡張し、順次土層図、遺物分布図、炭化物分布図を作成した。10月25日に土壌サンプルを採取して明花向遺跡A区すべての調査を終了した。

(齋持和夫・田中英司)

2. 先土器時代の遺構と遺物

(1) 第Ⅳ層の遺構と遺物

遺物分布（第6図）

第Ⅳ層ではK-6-1グリッドにおいて3点の石器が出土したのみである。台地上の削平部分が多いことから、本来は本層中に存在した遺物も失なわれている可能性がある。

石器（第11図）

A区の第Ⅳ層から出土した石器は3点だけである。その他、土壤中や表探資料の中にも本層中から出土すると判断されるものがある。それらを含めて以下にその内訳を示しておく。

ナイフ形石器……………2点

彫 器……………1点

劍 片……………2点

計5点

ナイフ形石器（1・246） 第Ⅳ層からプライマリーな状態で出土したものは1のみである。1は素材の打面を残し、もう一侧縁を折断面の一部に加工を施して製作されている。先端角は直角にちかく概形が切出に近い形状を成す。246は刃縁側の基部付近にも小規模な加工がある。基部は幅広で基端は平らになる。後述する明花向C区のナイフ形石器に類似する。おそらく同一時期のものであろう。ともに黒曜石製である。

彫 器（245） 硬質頁岩製の彫器である。しかし、第76号土壙より出土しており、2点のナイフ形石器に伴出するものは確定できない。上下に刻面を持っている。刻面と打点側の側縁との角度は上部では鋭角、下部ではやや鈍角となる。正面右側縁には刃こぼれ状の痕跡がある。

(2) 第Ⅷ・Ⅸ層の遺構と遺物

遺物分布（第6図）

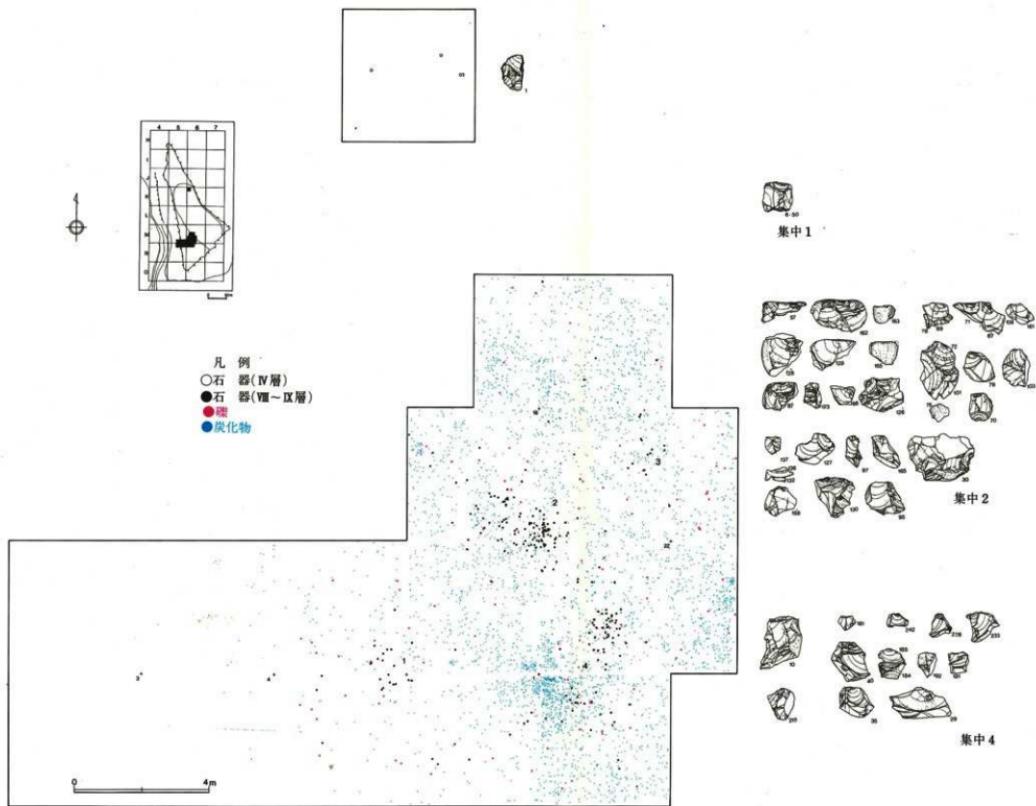
石器・礫・炭化物は第Ⅶ層の第Ⅰ黑色帯から第Ⅸ層の褐色ロームに集中して出土した。以下に各資料ごとの概略を記す。

石器分布 石器は大きく四つの集中を成すようである。

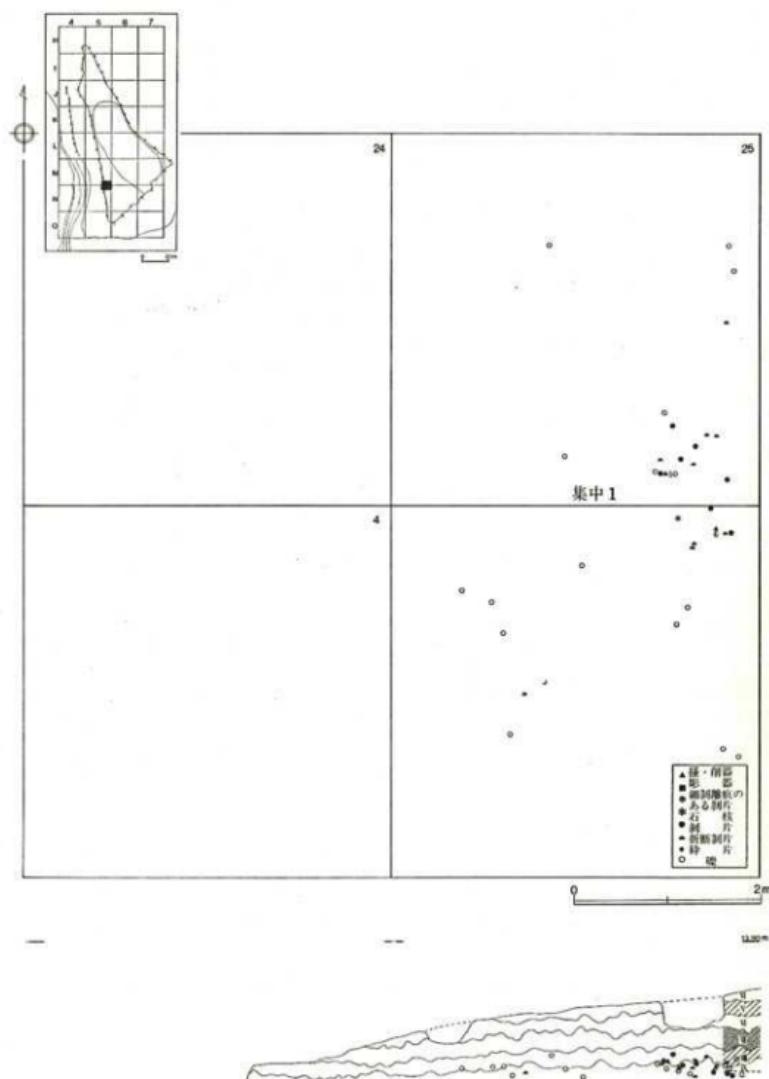
集中1（第6・7図） M-5-25・M-6-21・N-5-5・N-6-1グリッドに位置する。長辺1.5m余の広がりを持つ。20点前後の石器によって構成されている。一母岩と思われるメノウ製の石器が主に分布する。

集中2（第6・8・9図） M-6-16・17・M-6-21・22グリッドにある。長辺3mの広がりを持っている。二母岩の安山岩、一母岩のチャート製石器100点前後から成る。

集中3（第6図） M-6-17グリッドに位置している。2m余の長辺を持っているが、構成する石器数は20点に満たない。一母岩の安山岩製石器が分布している。

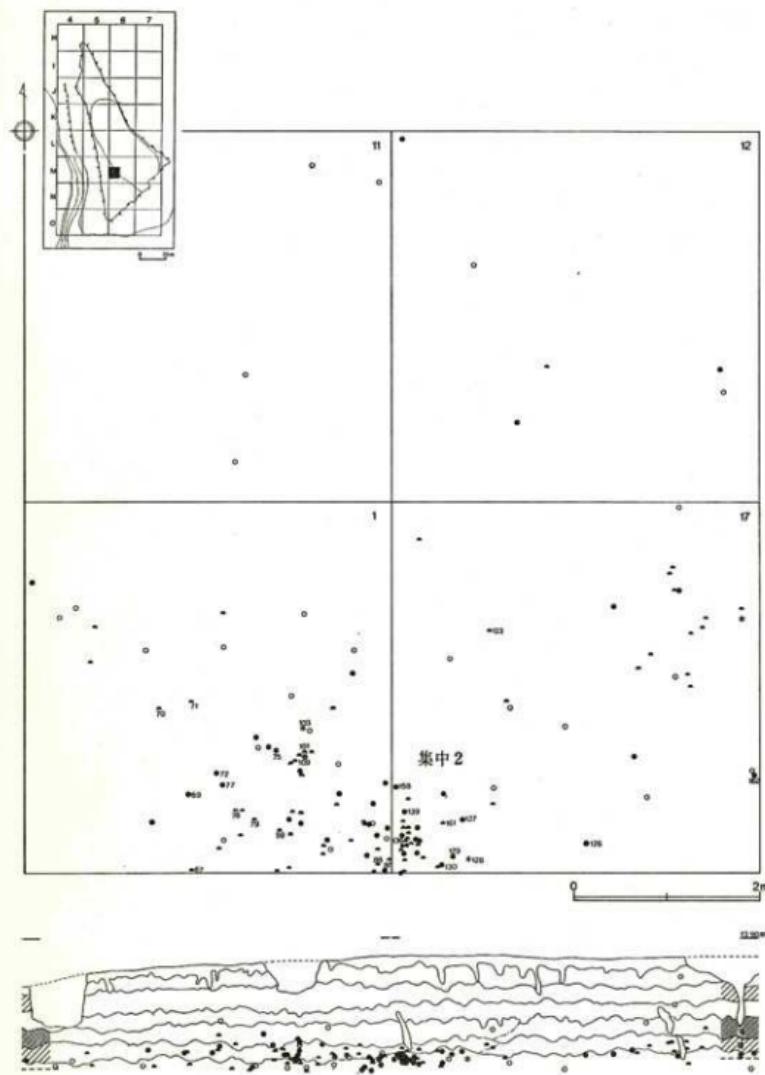


第6図 石器・瓦・炭化物分布

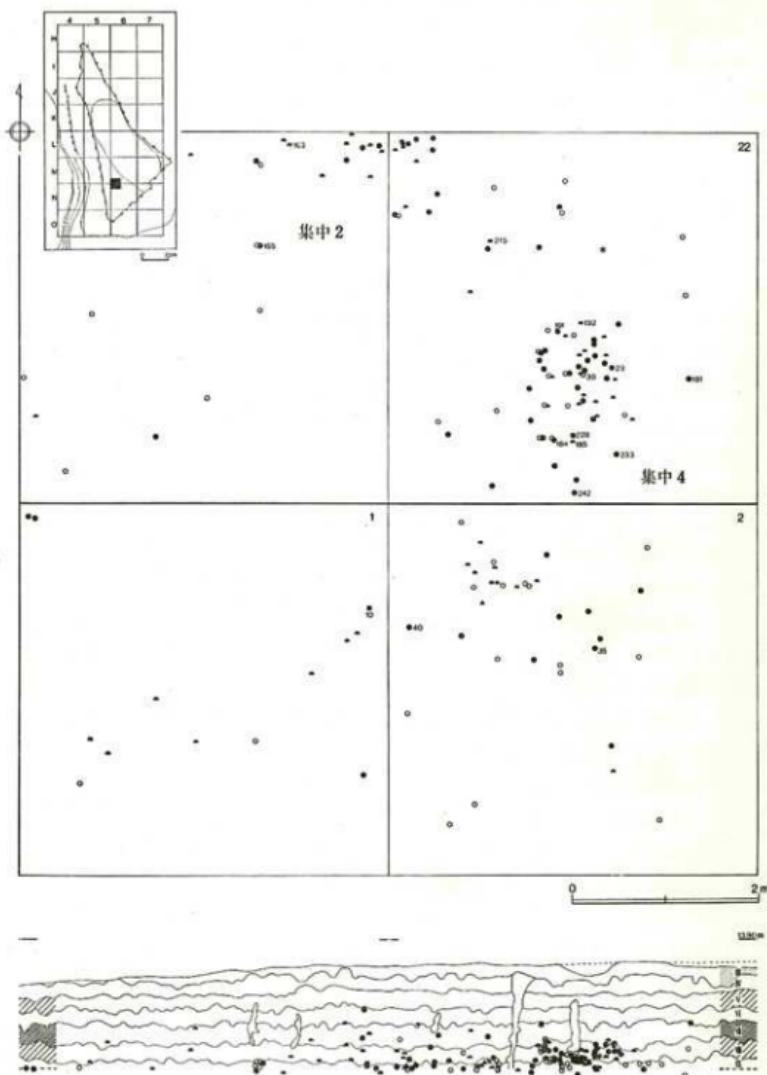


第7図 先土器時代遺物分布(1)

明花向A



第8図 先土器時代遺物分布(2)



第9図 先土器時代遺物分布(3)

明花向A

集中4（第6・9図） M-6-22・N-6-2グリッドにかけて分布している。長辺4mを越え、主にチャート製の石器約60点で構成されている。

母岩別分布（第10図） A区の第VII～IX層にかけて出土したものは、主に三つの石質と四つの母岩から製作された石器群である。即ち、安山岩の二母岩、及びチャート・メノウ製が一母岩ずつである。母岩ごとの内訳は以下のようになる。

	形器	搔・削器	石核	剝片	折断剝片	計
安山岩母岩1	1		3	31	59	94
安山岩母岩2				10	14	24
チャート母岩1		1	1	46	36	84
メノウ母岩1		2		7	7	16
						計 218

安山岩母岩1の分布と接合 安山岩母岩1の石器は集中1～4のすべてに分布している。その中でも集中2に大半が遺存している。集中2は東半部に母岩1、西半部に母岩2が対峙するように位置している。母岩1の接合例は集中2に顕著である。集中3にも一例存在するが、複数の集中にわたる接合例はない。集中2の中では残核（205・128）が東端に、剝片や折断剝片が中央部から出土している。

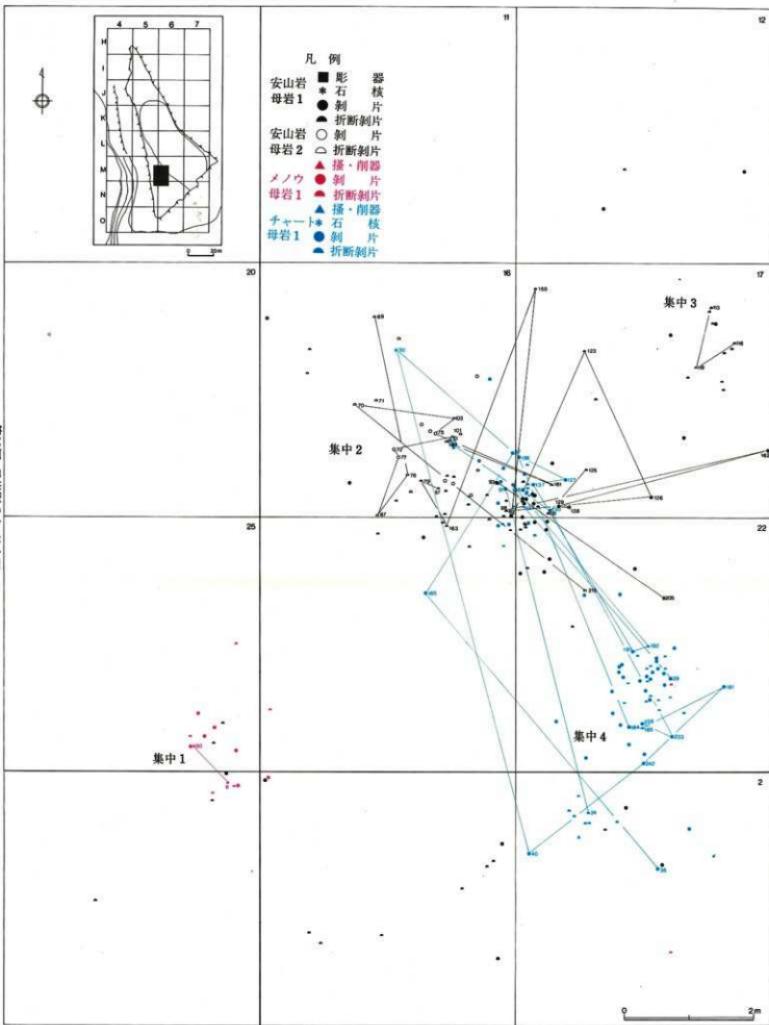
安山岩母岩2の分布と接合 母岩2は集中2にのみ分布している。残核ではなく剝片と折断剝片から成立している。長辺2m余の広がりを持つ。母岩1に周辺を取り囲まれるように分布している。母岩1に比較すると集中の密度は薄い。

メノウ母岩1の分布と接合 メノウは集中4に2点の折断剝片が検出された以外は、すべて集中1に遺存している。長辺は1.5mの大きさを持っている。接合は破損した搔器の一例だけである。石器相互の接合の度合は弱い。

チャート母岩1の分布と接合 チャート母岩1は集中2と集中4の複数に分離して分布している。集中2では長辺2m余、集中4では3m前後の大きさを持っている。集中2では安山岩母岩1と重複する部分があるが、集中の中でもさらに北半をチャート、南半に安山岩母岩1が主に分布しており、母岩ごとに占有する範囲はやや異なるようである。残核30は集中2の北端に位置している。二つの集中に遺存しているために8mを越える接合例がある。

礫分布 磚の殆どは親指大ほどの小円磧である。主に砂岩製のものが多い。調査区の全域にわたって散在するが、特定の集中を成さない。Ⅹ層に入ると特に出土量が多くなるようである。

炭化物分布 炭化物も検出を試みた調査区全域で間断なく認められる。その中では集中4に接するM-6-21・22・N-6-1・2グリッドに、径3m前後の特に密度の濃い分布がある。しかし厳密にはその境界を限りがない。垂直分布では石器よりも上位の層を中心としてその先後層に散っている。時期についても確定しがたい面がある。



第10図 母岩割分布・統合図

石 器

明花向遺跡A区Ⅶ～Ⅹ層にかけて出土した石器は以下の通りである。

搔・削器	3	石 核	6
彫 器	1	剥 片	104
細剝離痕のある剝片	1	折断剝片	127
計 242			

全体に剝片剝離作業に関わるものが多く遺存し、何らかの石器の形状を成すものや、その細部加工に関連する碎片の出土がないことが特徴である。

搔・削器（第11図6・50）メノウ製の接合例である。方形にちかい剝片を用いている。しかし末端に設けられた刃部の形状はややふぞろいで、製作途上で破損した未製品の可能性がある。

彫 器（10）安山岩母岩1の彫器と思われる例である。剖面は素材となった剝片の打面を除去するように設けられている。一般的な彫器とは異なる形状を持っている。

接合資料（第12～22図）

安山岩母岩1の接合例（第12～14図）夾雜物が多く、あまり良質とは言えない原石を用いている。剝がされている剝片も均一ではない。剝離は57・59・163・155・123・87・88・126・162・129・128の順で行なわれている。自然面を打面として剝離作業を行なっているものが多い。剝片は厚みのある方形のものが目立つ。拳大ほどの原石のおよそ半分が遺存しており、接合の状態から見るとあまり良好な剝片は剝がされてはいないようである。

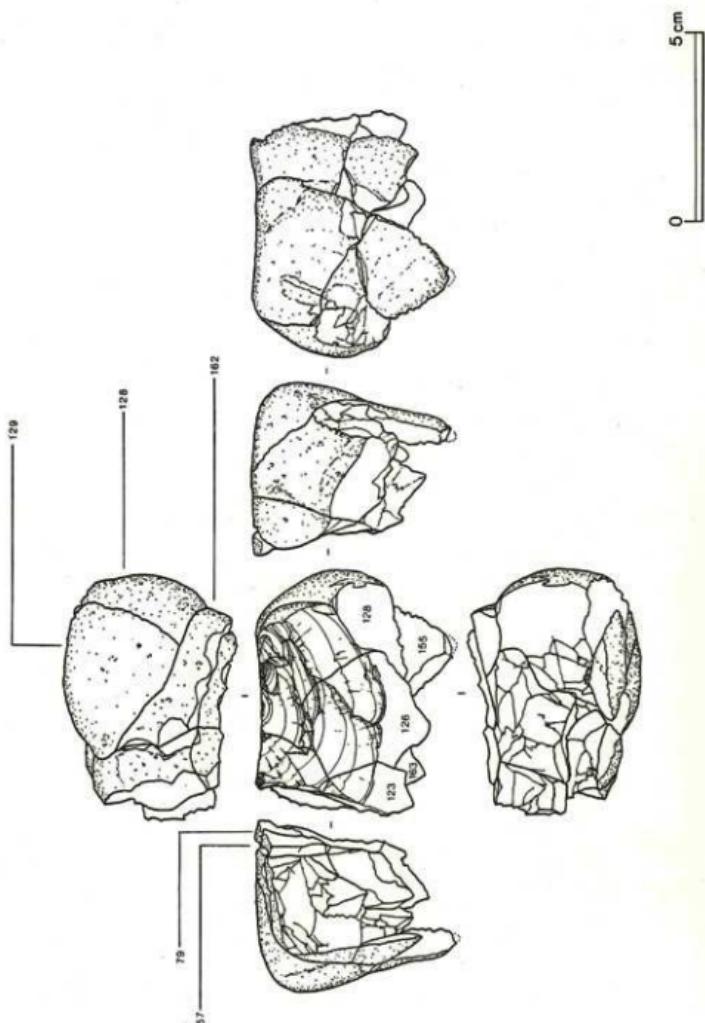
安山岩母岩2の接合例（第15～17図）接合した剝片の数が多く、剝離開始時の原石の形状をよく知ることができる。遺跡に遺存していたのは拳大ほどの円礎のおよそ1/3だけである。夾雜物の混じらない比較的良質の安山岩である。剝離は母岩1と同じく自然を打面として、四方から打ち割られている。順序は69・78・67・71・77・161・109・172・101・103・75・215・70となる。原石の大きさから推してもあまり大形の剝片は剝がされていないものと思われる。

チャート母岩の1接合例（第18～22図）チャート母岩1はさらに大きく三つの個体に分かれた。接合例1（第18・19図）は石核との接合である。石核（30）は素材の主要剝離面を残す大形厚手の剝片を用いている。剝離は打面となった主要剝離面側での作業の後に、158・185・184・181・242・40の順でやや幅広の剝片が剝がされている。接合例2（第20～22図）も大形の剝片に対する剝離である。29・136・132・192・191・137・127・97・165・35の順で剝離されている。剝片の殆どが素材となった大形剝片の主要剝離面を下間に残している。特に29では、打面部のやや山形に近い調整や横長の形状など所謂翼状の剝片に近い。接合例3（第22図）は4点の剝片から成る。228・233・130・98の順で薄手で幅広の剝片が、同心円上に打点を移動しながら打剝されている。

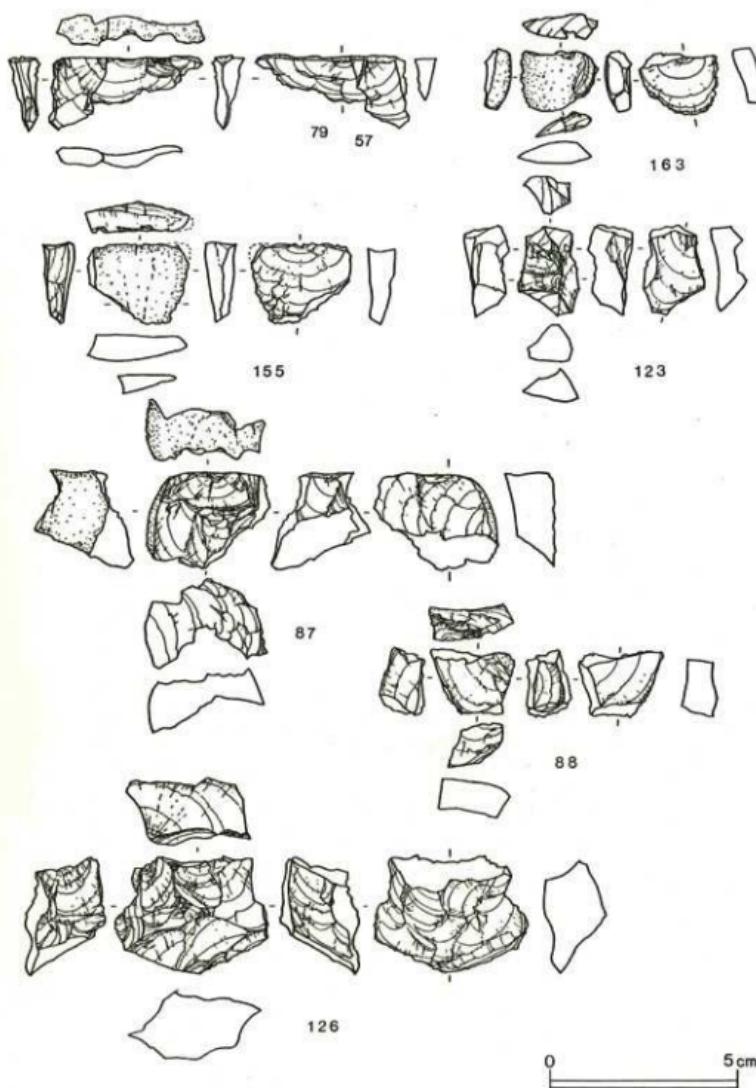
（田中 英司）



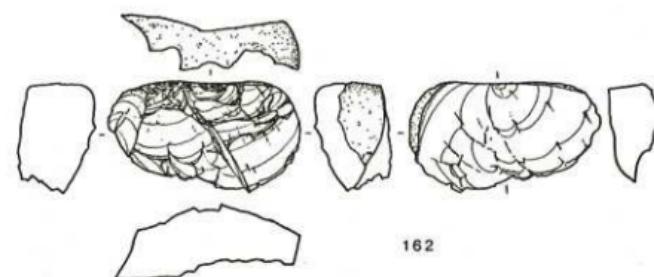
第11図 第IV層・第V層～IX層の石器



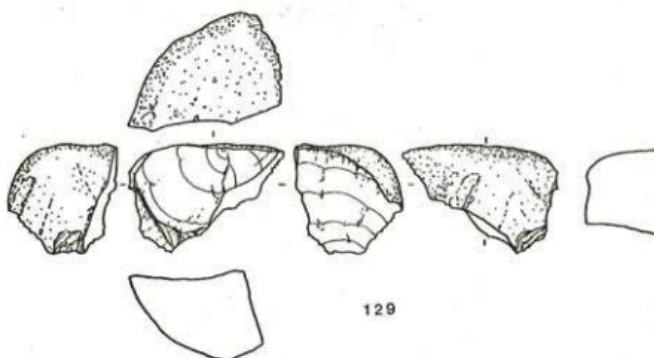
第12図 安山岩母岩1の接合例(1)



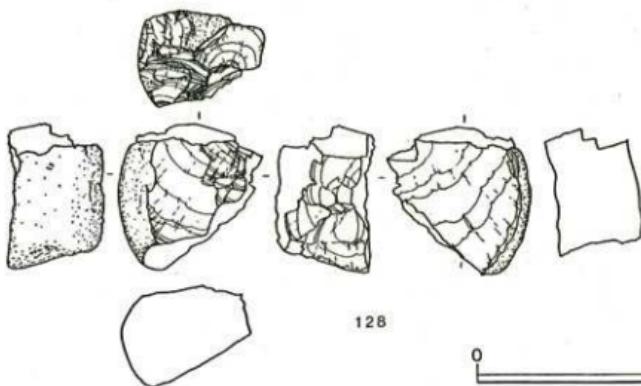
第13図 安山岩母岩 1 の接合例(2)



162



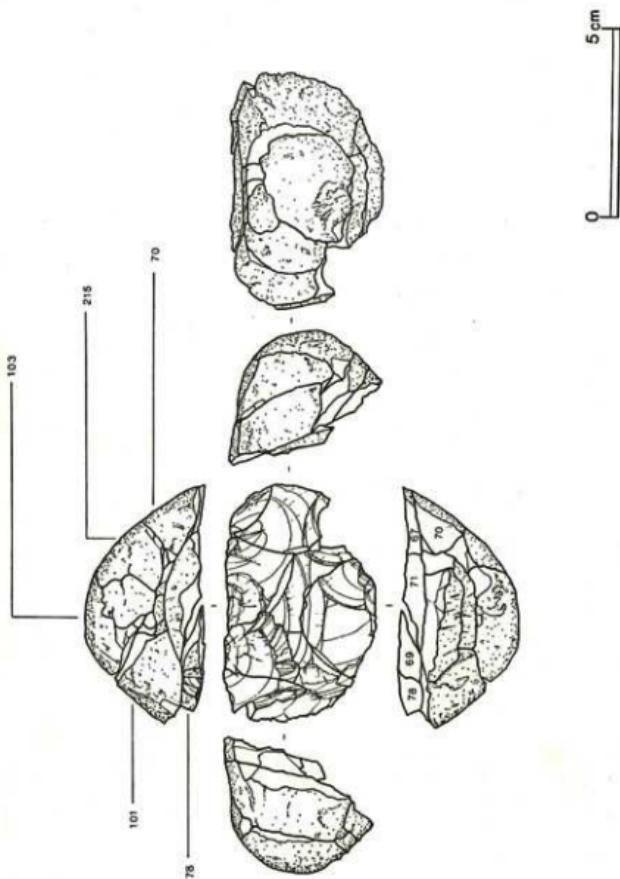
129



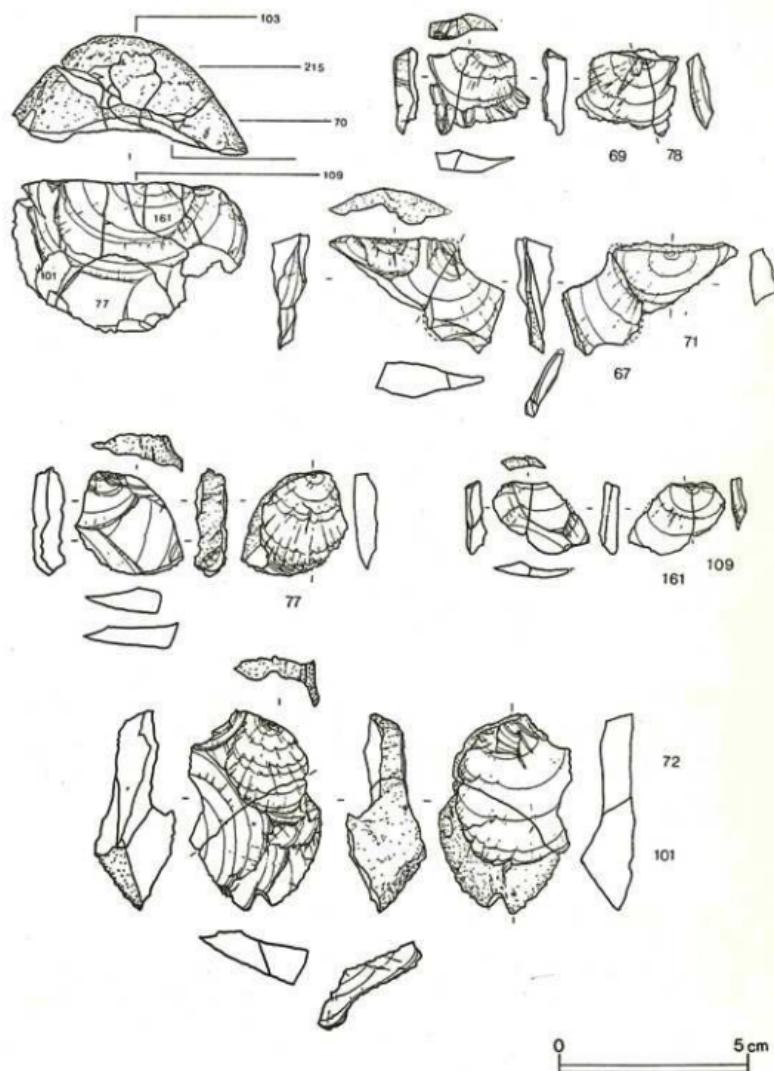
128

0 5 cm

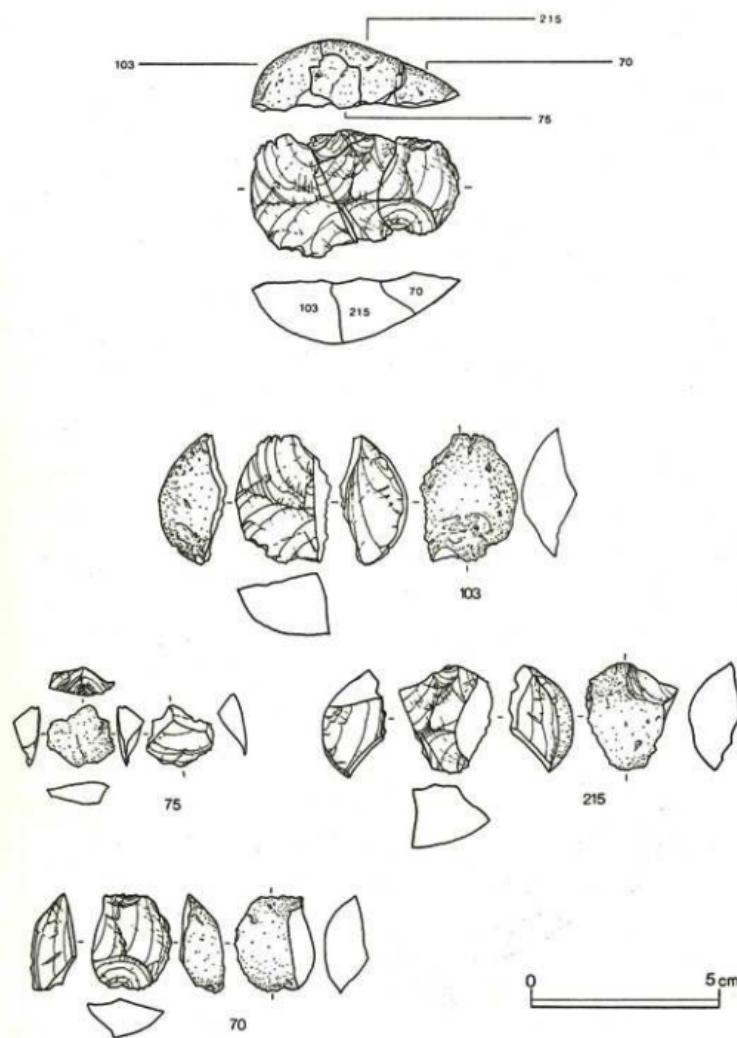
第14図 安山岩母岩1の接合例(3)



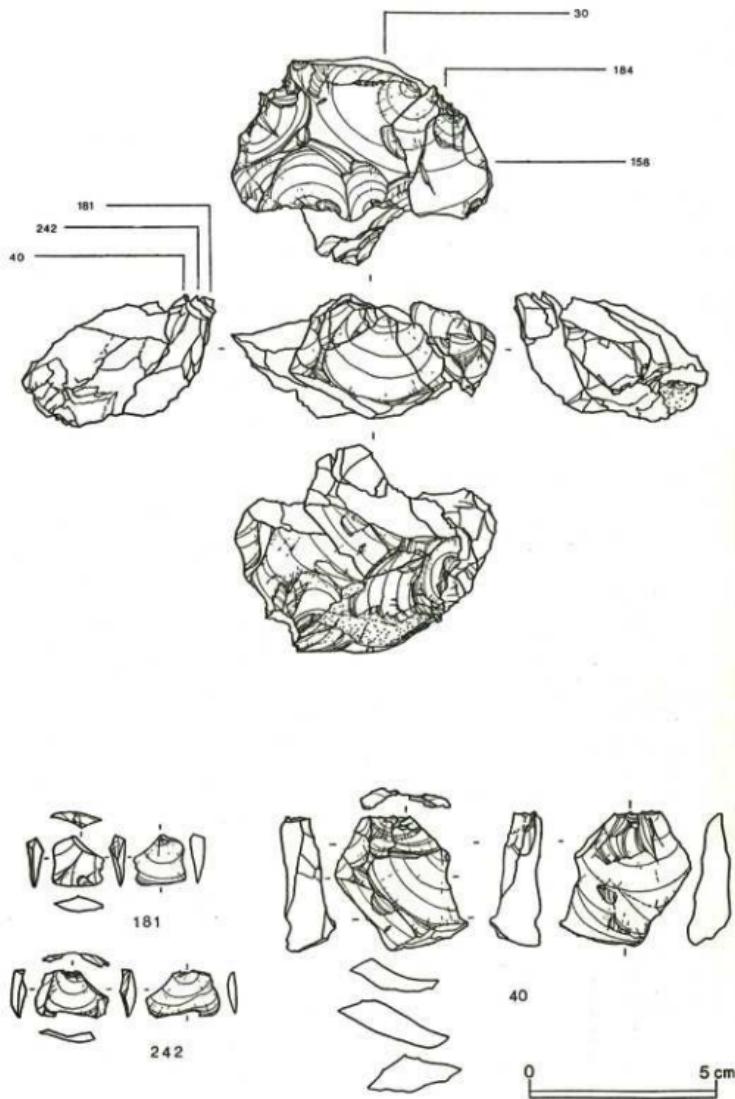
第15図 安山岩母岩2の接合例(1)



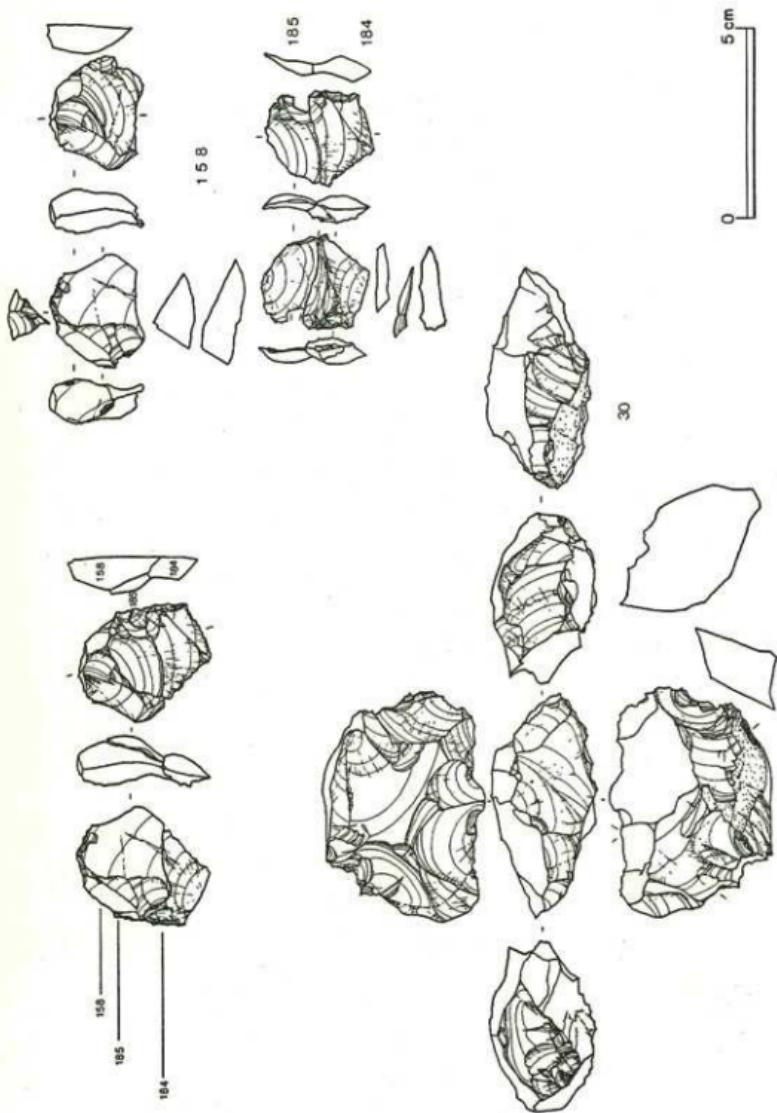
第16図 安山岩母岩2の接合例(2)



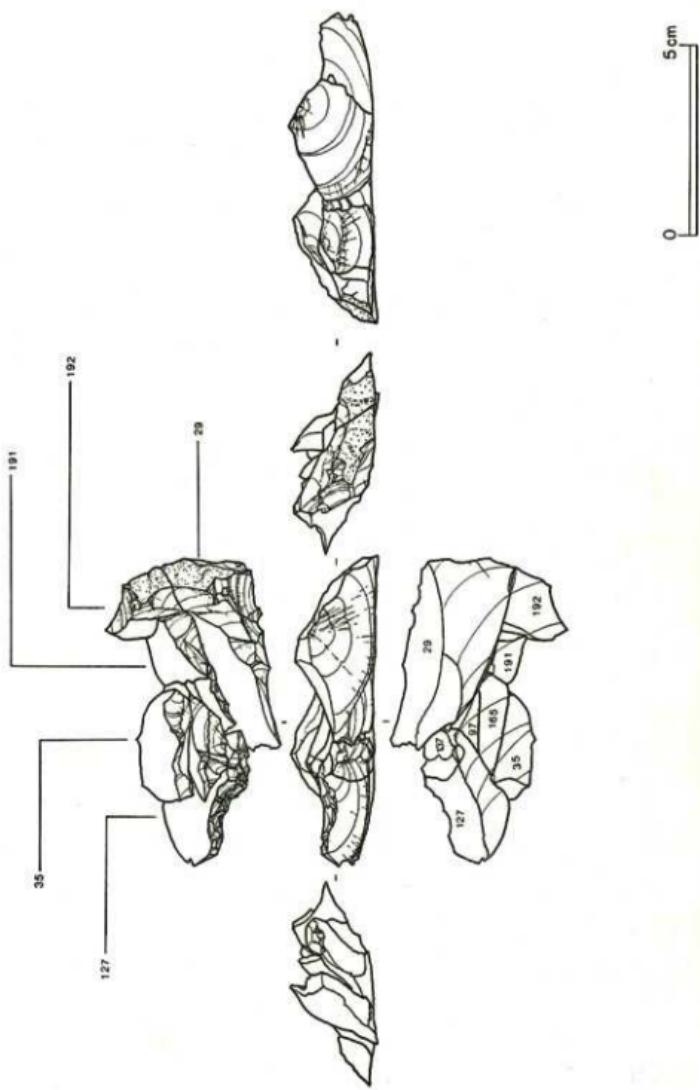
第17図 安山岩母岩 2 の接合例(3)



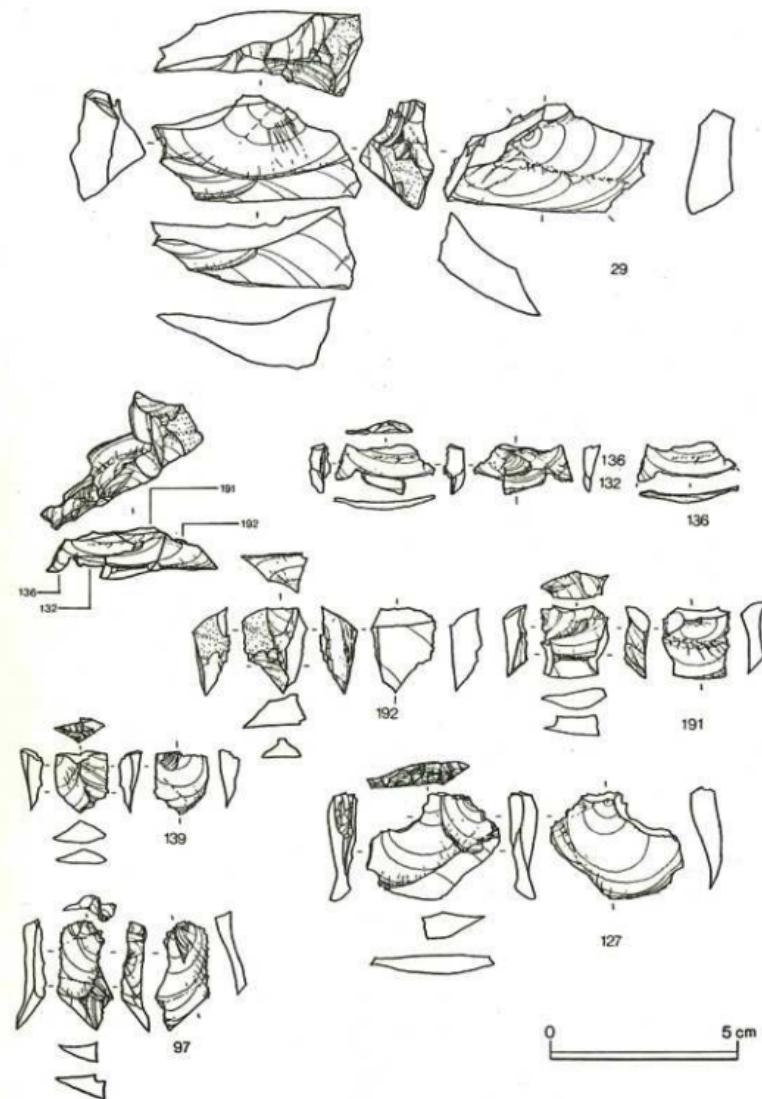
第18図 チャート母岩1の接合例1(1)



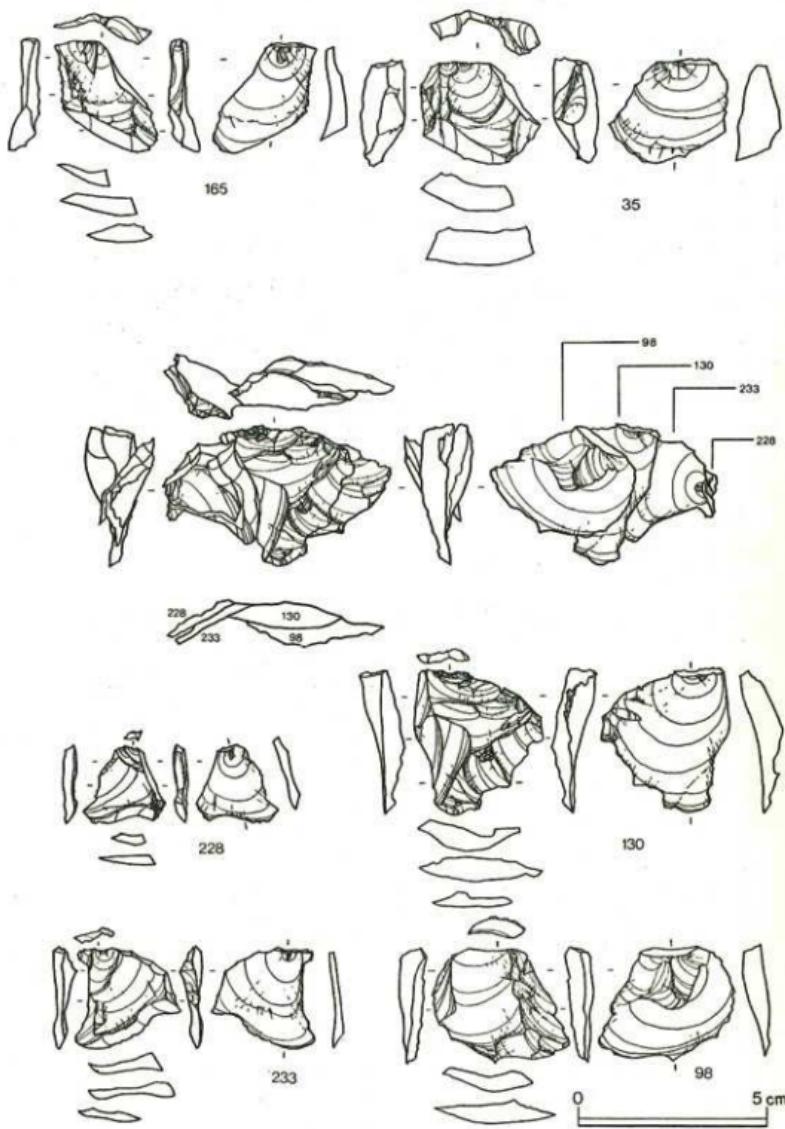
第19図 チャート母岩1の接合例1(2)



第20図 チャート母岩 1 の接合例 2(I)



第21図 チャート母岩1の接合例 2(2)



第22図 チャート母岩の1接合例 2・3

第1表 明花向遺跡A区先土器時代石器一覧表(2)

番号	グリット	北-南 (cm)	東-西 (cm)	標高(m) 上 下	層位	石器名	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損	備考
49	M-5-25	349.0	108.5	12.597	12.582	VII	折断剥片	チャート	2.6	2.8	0.9	4.88	
50	"	366.0	102.5		12.611	"	撥・削器	"	2.7	1.2	0.4	1.08	
51	"	366.5	104.5		12.605	"	剥片	メノウ	2.1	2.7	0.6	3.00	
52	M-6-12	313.4	263.0		12.496	"	"	安山岩	4.6	2.1	1.3	9.54	
53	"	257.0	43.0		12.864	VII	"	"	3.0	3.3	0.7	5.66	
54	"	254.0	230.0		12.551	VII	折断剥片	"	1.0	1.4	0.4	0.39	
55	"	8.0	393.0	12.685	12.652	"	剥片	チャート	3.6	3.0	1.2	11.99	
56	M-6-16	358.0	110.0		12.562	"	折断剥片	安山岩	0.9	1.6	0.2	0.28	
57	"	355.0	121.5		12.685	"	"	"	1.9	1.5	0.7	1.75	
58	"	342.0	111.8		12.633	"	剥片	"	1.0	1.5	0.2	1.58	
59	"	335.0	108.2		12.663	"	折断剥片	"	0.7	1.1	0.5	0.61	
60	"	345.5	99.0	12.820	12.810	VII	剥片	"	2.3	1.9	0.6	1.51	
61	"	336.5	98.5		12.760	"	折断剥片	"	0.8	0.7	0.2	0.20	
62	"	378.5	75.5		12.546	VII	"	"	1.3	1.1	0.4	0.43	
63	"	368.5	73.5		12.619	"	"	チャート	2.3	2.6	0.7	3.52	
64	"	364.8	69.5		12.757	"	剥片	安山岩	0.4	0.7	0.1	0.1	
65	"	374.0	36.0		12.478	"	"	メノウ	2.0	1.5	0.4	0.87	
66	"	357.0	73.0		12.460	K	折断剥片	安山岩	1.0	1.4	0.5	0.50	
67	"	396.5	215.0	12.552	12.540	VII	"	"	2.1	2.2	0.3	1.66	
68	"	345.0	261.5		12.685	"	剥片	"	1.3	1.7	0.5	0.75	
69	"	316.0	221.5	12.676	12.669	"	"	"	2.0	2.2	0.5	1.94	
70	"	223.0	253.5		12.530	K	折断剥片	"	2.7	2.1	1.2	5.58	
71	"	216.5	219.0		12.683	VII	"	"	2.0	3.4	0.8	4.07	
72	"	293.5	191.0	12.680	12.663	"	剥片	"	4.0	3.4	0.7	7.74	
73	"	255.0	148.5		12.495	K	"	"	0.5	1.0	0.1	0.01	
74	"	263.0	134.5		12.856	VII	"	"	1.4	0.7	0.3	0.22	
75	"	267.5	125.0		12.740	"	"	"	1.6	1.8	0.7	1.28	
76	"	281.0	108.5		12.640	VII	折断剥片	安山岩	1.3	1.6	0.4	0.70	
77	"	305.5	184.0	12.730	12.706	"	剥片	"	2.6	3.0	0.8	5.94	
78	"	331.5	169.5		12.494	K	折断剥片	"	1.1	2.4	0.5	0.99	
79	"	343.0	150.0		12.491	"	"	"	1.2	3.0	0.6	1.36	
80	"	360.9	165.5		12.754	VII	"	"	0.6	1.0	0.3	0.12	
81	"	374.0	188.5		12.700	"	"	"	1.6	1.2	0.2	0.21	
82	"	398.0	124.5		12.594	"	"	"	1.2	1.9	0.7	1.00	
83	"	394.8	113.0		12.697	"	"	"	1.3	1.5	0.4	0.48	
84	"	364.0	44.5		12.715	"	"	"	0.9	0.9	0.5	0.41	
85	"	380.0	27.0		12.484	K	剥片	チャート	0.5	1.3	0.2	0.28	
86	"	398.0	19.5		12.614	VII	折断剥片	安山岩	1.4	2.1	0.5	1.30	
87	"	398.5	8.0	12.625	12.597	"	剥片	"	3.0	3.1	2.0	15.46	
88	"	389.5	15.0		12.567	"	折断剥片	"	1.8	2.4	1.0	5.17	
89	"	385.0	1.0		12.628	"	"	チャート	1.0	0.9	0.2	0.09	
90	"	374.5	15.0		12.584	"	"	安山岩	0.9	1.3	0.4	0.31	
91	"	359.0	16.0		12.470	K	剥片	チャート	1.1	1.6	0.2	0.28	
92	"	353.0	4.0		12.534	"	"	"	0.5	1.1	0.1	0.03	
93	"	345.5	30.0		12.658	VII	折断剥片	安山岩	1.2	1.6	0.3	0.57	
94	"	324.5	20.0		12.603	"	剥片	チャート	1.0	1.8	0.5	0.40	
95	"	324.5	60.0		12.658	"	折断剥片	安山岩	0.8	1.6	0.4	0.35	
96	"	316.5	57.0		12.618	"	剥片	チャート	1.3	2.0	0.7	1.56	

第1表 明花向遺跡A区先土器時代石器一覧表(6)

番号	グリッド	北-南 (cm)	東-西 (cm)	標 高(m)		層 位	石 器 名	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	破損	備 考
				上	下									
241	M-6-22	314.5	197.0		12.590	■	剝 片	"	1.5	2.3	0.5	1.16		
242		388.0	198.5		12.449	K	"	"	1.2	2.0	0.3	0.56		
243		381.2	285.5		12.622	■	"	"	3.0	3.5	1.3	6.69		
244		308.5	177.0		12.506	K	"	"	0.4	0.7	0.1	0.02		
245					"	彫 器	硬質頁岩	7.4	3.2	1.4	27.71		SK-76	
246					"	ナイフ形石器	黑曜石	3.8	2.2	0.9	5.05			
247	M-6-16	221.0	62.0		12.834	VII	折断剝片	鞍山岩	0.6	0.8	0.1	0.12		表採

3. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 壇穴状遺構

第1号壇穴状遺構 (SB-1) (第23図)

調査区のはば中央部L-5-4グリッドに位置する。全体は隅丸長方形を呈するが、北壁は丸味を帯び、西壁は強く屈曲を描く。規模は長軸4.26m、短軸3.20mを測り、主軸方向はおよそN-24°-Eを指す。壁は高さ30~40cm程ではば垂直に立ち上がる。床面はハードローム層に掘り込まれており、緩やかな凹凸を有するもの硬くしまっている。また、南壁の西寄りには壁に沿って1.95×64cmを測る長梢円形の掘り込みが見られ、壁は強くオーバーハンプしている。この掘り込みは西へ向けて傾斜しており、コーナー部では円形の窪みとなっている。

覆土は以下の12層に分けられる。

第1層 耕作土

第2層 茶褐色土 きめ粗くしまり弱い。ローム溶混し、やや斑文となる。

第3層 黒褐色土 しまり・粘性は優れるが、ややボソつく。ローム・スコリア粒を若干含む。

第4層 暗褐色土 しまり弱くバサつく。ローム・スコリア粒を若干含む。

第5層 暗茶褐色土 しまり・粘性が優れ、スコリア粒を若干含む。ローム溶混し斑文となる。

第6層 暗茶褐色土 しまり弱くバサつく。ローム・スコリア粒を多含し、カーボンも見られる。

第7層 茶褐色土 きめ粗いがしまり良い。含有物が見られない單一的土層。

第8層 暗黄色土 しまり・粘性ともに強い。床面の溶軟化層。

第9層 暗黄褐色土 しまり・粘性ともに強く、ローム粒で多く含む。

第10層 明茶褐色土 しまり・粘性ともに弱く、ローム・スコリア粒を多く含む。

第11層 黄褐色土 壁及び床面の溶軟化層。ほとんどローム質。

第12層 明黄褐色土 床面の溶軟化層。上層へブロック状に入り込む。

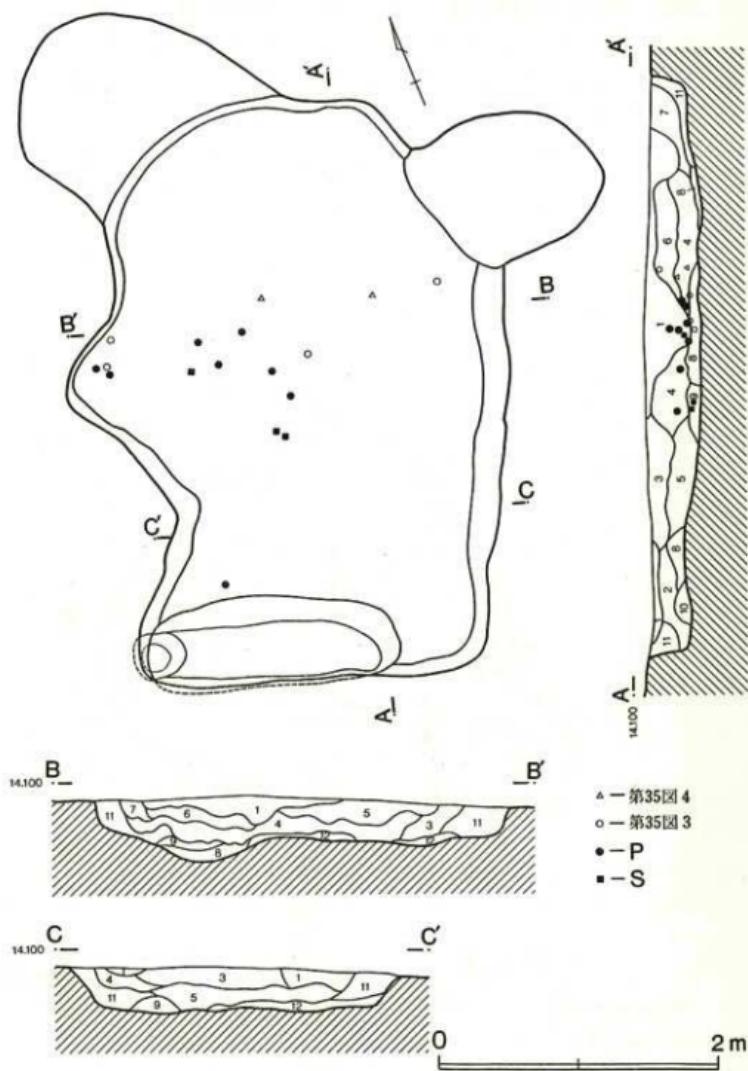
遺物はごく少量が床面よりはやや浮いた状態で出土しているが、第V群の深鉢形土器等が中央部付近に集中している。

第2号壇穴状遺構 (SB-2) (第24図)

L-5-14グリッド、SB-1の南西約6mに位置する。3.02×2.64mを測る隅丸の不整方形を呈し、床面までの深さは約20cmである。さらに中央部には140×130cmの方形状の浅い掘り込みが見られる。いずれも床面はローム層に達しているが、しまりは弱く軟質である。この他、南西の壁際にも直径約70cm、深さ50cmの円形土壙が見られる。覆土の状態からは本跡と別の遺構と考えられるが、この上に近世の土壙があるため新旧関係は不明である。

覆土は以下の14層に分かれ、いずれも粘性・しまりの優れた土層となっている。このうち第10~14層は円形土壙の覆土である。

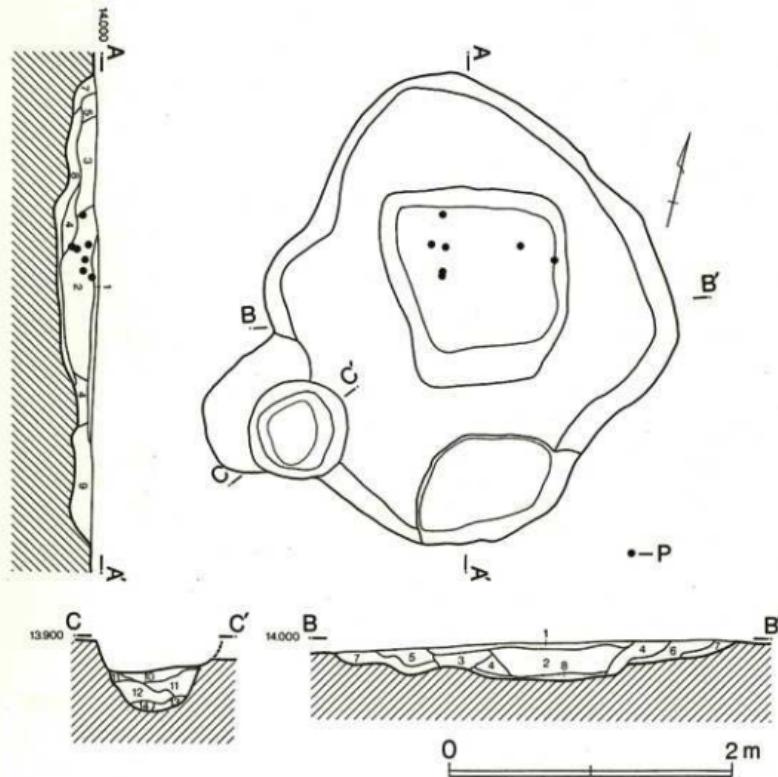
第1層 明黒褐色土 きめ細かく、スコリア粒を少量含む。



第23圖 第1号竖穴状造構 (SB-1)

明花向A

- 第2層 黒褐色土 ロームの小ブロックを溶混し、スコリア粒を多量に含む。
- 第3層 褐色土 ロームブロックを溶混し、ややボソつく。（第2層に近似）
- 第4層 茶褐色土 ロームを薄く全体に溶混する、スコリア粒を少量含む。
- 第5層 茶褐色土 スコリア粒及び黑色土粒を多く含む。
- 第6層 茶褐色土 第4層よりも色調は明るく、ロームの影響を強く受ける。
- 第7層 暗黄褐色土 ほとんどローム。
- 第8層 褐色土 ロームブロックを少量含み、粘性が強い。
- 第9層 明黒褐色土 きめ粗くボソつく。ロームブロックで構成される。
- 第10層 暗茶褐色土 ロームブロックを多く含む他、黑色土粒をわずかに含む。粘性に優れる。
- 第11層 暗褐色土 しまりやや劣り、ロームブロックを少量含む。
- 第12層 暗褐色土 ローム粒を全体に含む。



第24図 第2号竪穴状遺構 (SB-2)

第13層 暗褐色土 ローム粒を若干含むが、概ね混有物の見られない单一的土層である。

第14層 暗黄褐色土 わずかにロームを含む。粘性・しまりともに非常に強い。

遺物は中央部やや北寄りに7片の第V群土器が出土したが、覆土の上位から中位までと床面よりやや浮いている。

(2) 炉 穴

第1号炉穴 (S F-1) (第25図)

(位置) J-5-14グリッド。(形状) 北側を近世の溝、西側の一部を同土壌によって切断される。全体は梢円形を呈するが、南に浅い円形の掘込みが見られる。(規模) 120×80×20cm (主軸方向) ほぼN-Sを指す。(覆土) 以下の2層に分けられる。

第1層 暗褐色土 ロームスコリア粒を若干含む。

第2層 暗黄褐色土 ローム粒・ブロックを多量に含む。

(焼土の状態) およそ70×40cmの範囲に広がり、厚さは約10cmを測る。赤褐色のきれいな完全焼土層となり、しまり良くザラザラである。(炉跡) 炉穴の中央部にあり、60×50cm程の円形を呈する。深さは約10cmである。(出土遺物) 覆土中より7片の第V群土器が出土しているが、焼土中に含まれていない。

第2号炉穴 (S F-2) (第25図)

L-6-7グリッドを中心位置し、3基が重複している。内1基は北側に近代の攪乱を受けており、全体の形状・規模は不明である。新旧関係はF₁・F₃(古)→F₂(新)である。

覆土は全体で以下の9層に分れる。この内第1~6層はF₁、第7・8層はF₂、第9層はF₃、それぞれの覆土である。

第1層 黒褐色土 しまり良く焼土・ローム粒を多量に含み、若干の炭化物が見られる。

第2層 黒褐色土 きめ細かくしまり良い。第1層に比して焼土粒の量が多い。

第3層 暗茶褐色土 ローム粒の大きさ、量が増加する。明るい色調で粘性強い。

第4層 黒褐色土 ローム・焼土粒を含み、しまりが良い。

第5層 茶褐色土 主にロームブロックで構成され、焼土粒も多く含まれる。

第6層 暗茶褐色土 しまりやや弱く、焼土・ローム粒を含む。

第7層 黑褐色土 焼土・ローム粒を多含し、比較的軟質な土層となる。

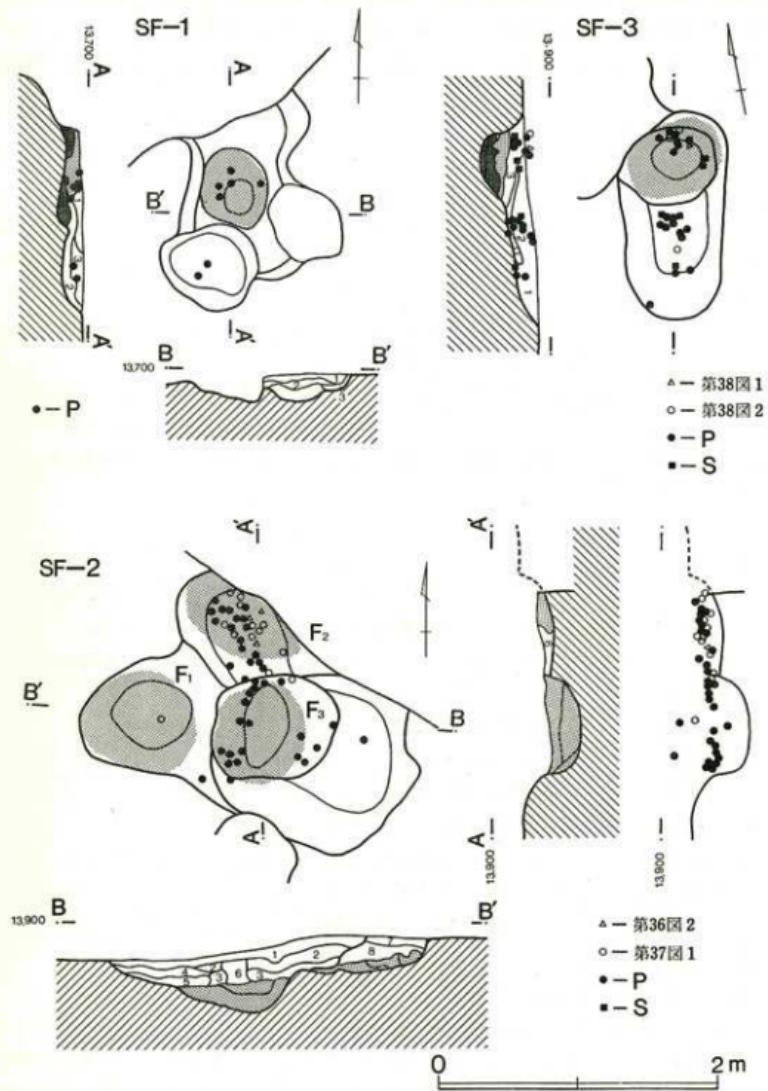
第8層 暗赤褐色土 焼土粒の大きさと量がかなり増加し、しまりも強い。

第9層 黄褐色土 しまりは良いが、きめ粗くボソつく。焼土粒はほとんど見られない。

遺物はF₂の炉床直上(一部焼土中)より第V群の深鉢形土器がまとめて出土している。

F₁ (形状) F₃に切断されているため、形態と規模は不明である。確認面から炉床までの深さは約25cmを測る。(焼土の状態) 80×70cm程の範囲を有し、厚さは約10cmを測る。暗赤褐色できめやや粗く、しまり・粘性に優れる。加熱されたローム粒を良く含む他、若干の炭化物が見られる。

(炉跡) 90×80cm程の梢円形となり、炉床は広いがさほど赤焼していない。



第25図 第1・2・3号炉穴 (SF-1・2・3)

F₂ (形状) F₃ 及び搅乱坑に切断されるため、ほとんど炉跡部のみの残存となっている。確認面から炉床までの深さは約45cmである。(焼土の状態) 推定で90×60cm程になり、厚さは約12cmである。淡い赤褐色を呈し、しまりは良いがきめ粗くボソつく。(炉跡) 約80×70cmを測り、炉床はガリガリに赤焼している。

F₃ (形状) 円に近い梢円形を呈し、壁は傾斜する足場より緩やかに立ち上がる。(規模) 150×(130)×30cm (主軸方向) N-64°-W (焼土の状態) 100×80cm の範囲に広がり、厚さは約22cmを測る。暗赤褐色のしまりの弱い土層となる。径3~4mmの焼土粒を多量に含む他、若干の炭化物粒が見られる。(炉跡) 足場が傾斜するため明確ではないが、およそ90×75×20cmの梢円形を呈する。炉床はあまり焼けておらず、わずかに赤く認められるにすぎない。

第3号炉穴 (S F-3) (第25図)

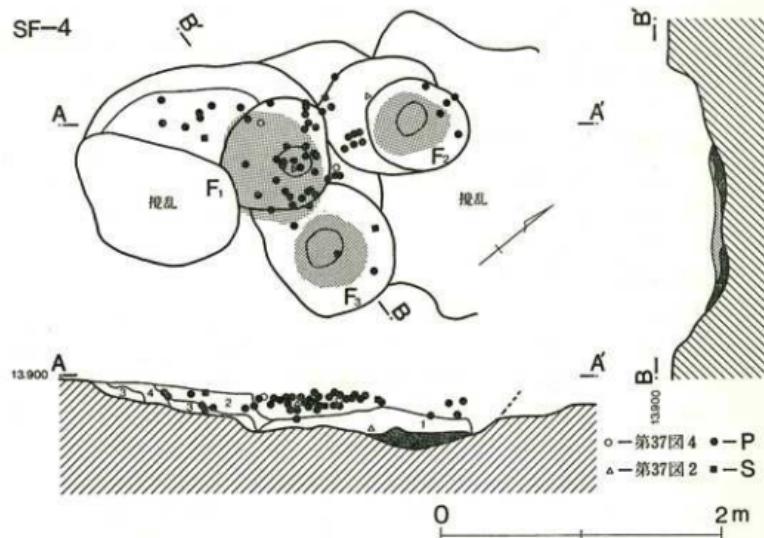
(位置) L-6-24グリッド (形状) 北西の一部を切断されるが、全体はきれいな長梢円形を呈する。足場と炉跡の区分も明確である。(規模) 150×70×20cm (主軸方向) N-8°-E (覆土) 以下の3層に分けられる。

第1層 暗茶褐色土 全体に少量の焼土粒及びローム・炭化物粒を多含。しまり良く粘性弱い。

第2層 暗茶褐色土 ロームを薄く溶混する。焼土粒を若干含み、しまり粘性ともに強い。

第3層 暗茶褐色土 焼土・ローム粒を多く含む。しまり良いが粘性は弱い。

(焼土の状態) 60×50cmの範囲を有し、厚さは約20cmを測る。上層は暗褐色できめ細かいのに対



第26図 第4号炉穴 (S F-4)

明花向A

し、下層は赤褐色のきれいな完全焼土層となる。(炉跡) 70×60×20cm。炉床は赤焼が顕著である。
(出土遺物) 炉跡中には見られないが、第V群の深鉢形土器1個体が接合している。

第4号炉穴 (S F-4) (第26図)

L-6-24グリッドを中心に位置し、3基が重複している。土層観察によっても明確な切り合い
は見られず、3基はかなり短時間のうちに設営されたものと考えられる。

覆土は以下の4層に分けられる。

第1層 暗茶褐色土 スコリア粒を若干含み粘性が強い。

第2層 暗茶褐色土 スコリア・ローム粒を含む。

第3層 黄褐色土 ほとんどによって構成される。

第4層 暗茶褐色土 ローム粒を多く含みしまりがない。

遺物はF₁の覆土中位に集中して出土している。いずれも第V群土器で、2個体が接合している。

F₁ (形状) 長梢円形プランを有し、傾斜する足場と炉跡からなる。(規模) 180×(100)×20cm
(主軸方向) N-43°-E (焼土の状態) F₁を含めて 120×70cmを測る。厚さ約10cmの赤褐色を呈
するきれいな焼土である。(炉跡) 80×80×15cmの不整円形であり、炉床はわずかに赤焼している。

F₂ (形状) ほぼF₁と同方向に足場が延びるものと思われる。(焼土の状態) 70×50cmの範囲
で、厚さ約12cmを測る。全体は褐色を呈し、焼土ブロックを多量に含む。(炉跡) 80×65×15cm
で、足場方向へ緩やかに立ち上がる。炉床は良く赤焼している。

F₃ (形状) F₁及びF₂と交わるように設営され、足場はF₁の炉跡部分へ延びると思われる。

(焼土の状態) 範囲はF₁の項に示したが、色調や土質も良く似ている。(炉跡) 110(推定)×95
cmの梢円形を呈し、遺構確認面からの深さ約40cmを測る。炉床はわずかに赤く焼けている。

第5号炉穴 (S F-5) (第27図)

(位置) M-6-4グリッド (形状) 一部SK-12を切って設営される。隅丸長方形を呈し、SK
-12重複部には75×45cmの梢円形ピットが見られる。(規模) 160×90×15cm (主軸方向) N-68°
-W (覆土) 以下の6層に分かれる。

第1層 暗茶褐色土 ローム粒を多く含むがしまり弱い。

第2層 暗褐色土 ローム粒を多く含むが黒色が強い。

第3層 暗黄色土 しまり・粘性ともに弱くバサつく。壁及び床面の溶軟化層。

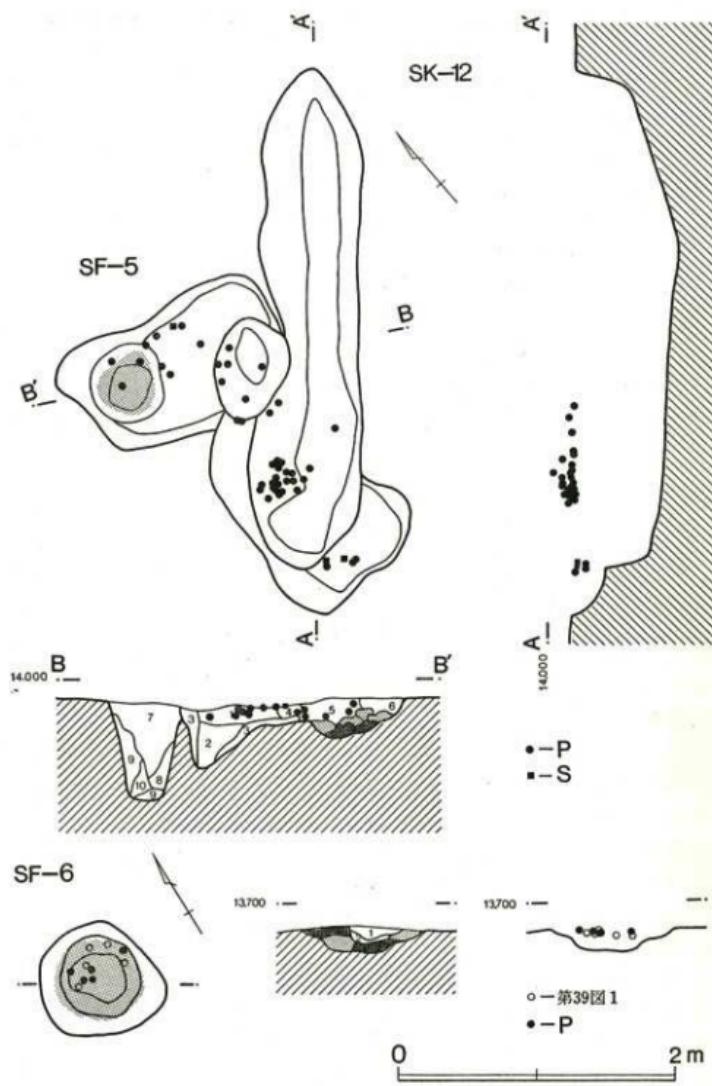
第4層 暗黄褐色土 しまり良いがボソつく。若干の焼土粒を含み、他層との境界は明瞭。

第5層 黑褐色土 第4層に似るが、焼土粒を良く含んでいる。

第6層 暗茶褐色土 しまり弱くバサつく。ローム溶混のため直文を呈し、焼土粒を若干含む。

(焼土の状態) 60×50cm程の範囲を有し、厚さは約15cmを測る。上層では褐色から茶褐色となり、
主に焼土粒によって構成されるしまりの弱い層となる。下層はきれいな赤褐色でしまりも強い。

(炉跡) 55×50cmの円形で深さは約16cmである。炉床の赤焼度は高くない。(遺物) 足場を中心に
15点の第V群土器が出土しているが、焼土中からは検出されていない。1個体が接合。



第27圖 第5・6号炉穴(SF-5・6)第12号土壤(SK-12)

明花向A

第6号炉穴 (S F-6) (第27図)

(位置) N-6-16グリッド (形状) 不整円形。周辺での削平が激しいため、炉跡部のみが残存したものと思われる。(規模) 95×85×18cm (覆土) 以下の2層である。

第1層 黒褐色土 しまり弱くバサつく。焼土粒を若干含む。

第2層 暗茶褐色土 しまり弱く焼土をしみ状に含む。

(焼土の状態) ほぼ全体の規模と同じであるが、焼土層はドーナツ状に広がっている。赤褐色の焼土粒と焼土ブロック、及び褐色土粒からなる。下層では炭化物粒が良く見られる。(炉跡) これも全体規模と同じになり、炉床の赤焼度は低い。(遺物) やや炉床より浮いているが、良好な接合を示す第V群土器がまとめて出土している。

第3表 明花向遺跡A区縄文時代炉穴一覧表

番号	グリッド	形 素	規 模(cm)	炉 跡(cm)	主軸方向	出 土 遺 物	備 考
1	J-5-14	楕 円 形	120× 80×20	60×50×10	N-S	第32図9~11	
2F ₁	L-6-7		? × ? ×25	90×80		第32図12~15	
F ₂	L-6-7		? × ? ×45	80×70		第35図1,第36図	
F ₃	L-6-7	楕 円 形	150×(130)×80	90×75×20	N-64°-W	第37図1	
3	L-6-24	長 楕 円 形	150× 70×20	70×60×20	N-8°-E	第33図1~4,第38図1~3	
4F ₁	L-6-24	長 楕 円 形	180×(100)×20	80×80×15	N-43°-E	第33図5~15 第37図2~4	
F ₂	L-6-24		70× 50×12	80×65×15			
F ₃	L-6-24		? × ? ×40	(110)×95			
5	M-6-4	隅丸長方形	160× 90×15	55×50×16	N-68°-W	第33図16~19,第38図4	
6	N-6-16	不 整 円 形	90× 85×18			第33図20~21,第39図1	

(3) 土 壤

第1号土壤 (SK-1) (第28図)

(位置) J-5-3グリッド (形状) 長楕円形で一部を近世土壤に切断される。床面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。(規模) 250×130×20cm (主軸方向) N-44°-W (覆土) SK-1~4まで以下に一括する。

第1層 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含み、きめ細かくしまり強い。

第2層 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまり強い。

第3層 暗茶褐色土 ロームブロックを全体に溶混する。きめ細かくしまり強い。

第4層 暗茶褐色土 第3層に近似するが、色調暗くローム粒も少ない。

第5層 黒褐色土 粘性しまりともに優れる。ローム粒を若干含む。

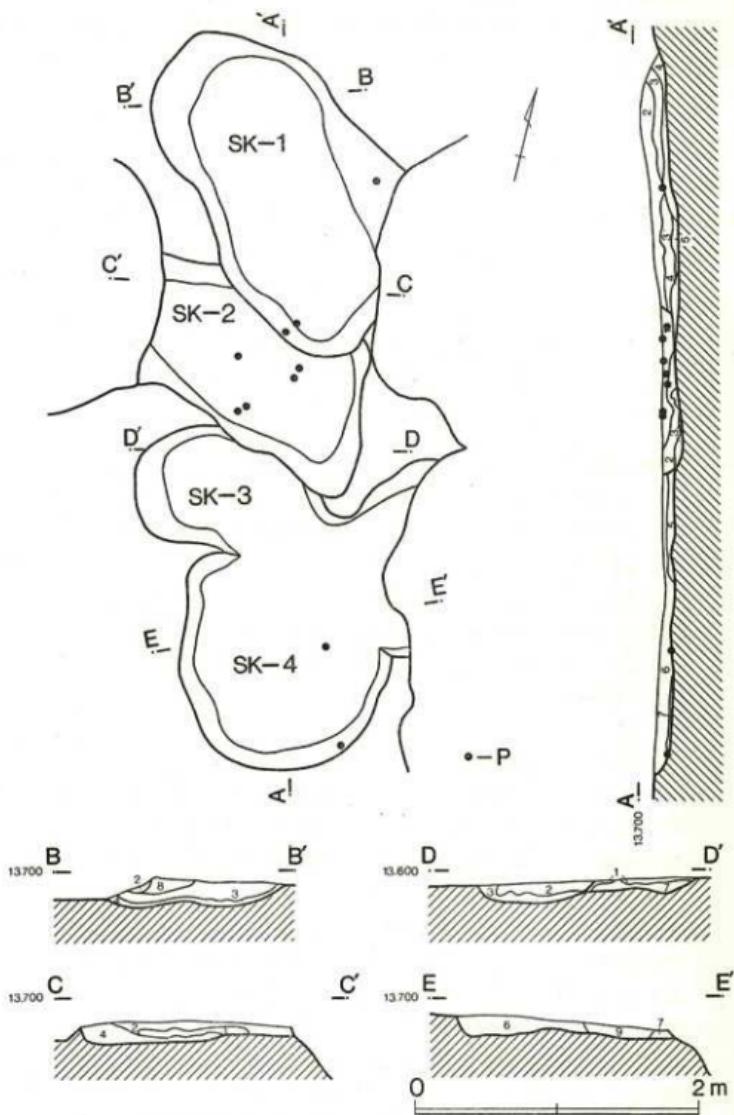
第6層 暗茶褐色土 ローム粒を全体に薄く含む。しまり良い。

第7層 明茶褐色土 第6層に近似するが、色調やや明るい。

第8層 明黒褐色土 少量のロームブロームを良く含む。

第9層 茶褐色土 きめ粗くバサつく。混有物があまり見られない単一的土層。

(遺物) 第V群土器1点が出土している。



第28図 第1・2・3・4号土壤 (SK-1・2・3・4)

明花向A

第2号土壤 (SK-2) (第28図)

(位置) J-5-3グリッド (形状) 長楕円形。SK-1埋没後に設営される。床面は平坦で良くしまっており南へ緩く傾斜する。(規模) 120×160×15cm (主軸方向) N-81°-W (覆土) SK-1参照 (遺物) 覆土上位より7点の第V群土器が出土している。

第3号土壤 (SK-3) (第28図)

(位置) J-5-3グリッド (形状) 不整形。北をSK-2、東を近世土壤によって切断される。床面はやや凸凹を描き、しまりも弱い。(規模) 80×120×(190)×10cm (覆土) SK-1参照 (遺物) 見られなかった。

第4号土壤 (SK-4) (第28図)

(位置) J-5-8グリッド (形状) 円形を呈すると思われる。床面は概ね平坦であるがあまりしまっていない。SK-3との新旧関係は不明である。(規模) 170×150×15cm (覆土) SK-1参照 (遺物) 床面より2点の第V群土器が出土している。

第5号土壤 (SK-5) (第29図)

(位置) K-5-19グリッド (形状) 暗丸方形様であるが、北側は瘤状に大きく突出する。床面は瘤状に壅み、壁の立ち上がりも緩やかである。(規模) 180×110×20cm (主軸方向) N-33°-W (覆土) 以下の3層に分けられる。

第1層 暗茶褐色土 黒色土粒とローム粒で構成され、きめ粗くしまりも弱い。

第2層 黒色土 少量のローム粒を含み、きめ細かくしまり良好。

第3層 黄褐色土 ローム粒及び同ブロックを多量に含む。しまり・粘性ともに強い。

(遺物) 見られなかった。

第6号土壤 (SK-6) (第29図)

(位置) K-5-25グリッド (形状) 暗丸方形を縦位に並べた状態。土壤2基が切り合う可能性もある。いずれも平坦で良くしまった床面となり、ここから壁がほぼ垂直に立ち上がる。(規模) 北側-100×70×70cm、南側-90×90×45cm (主軸方向) N-37°-E (覆土) 以下の8層に分かれる。

第1層 耕作土

第2層 黒褐色土 ローム及びスコリア粒を多く含む。

第3層 暗褐色土 第2層に近似するが、ロームブロック (径10mm程) を少量含む。

第4層 暗茶褐色土 ロームの影響が強く、粘性が強い。

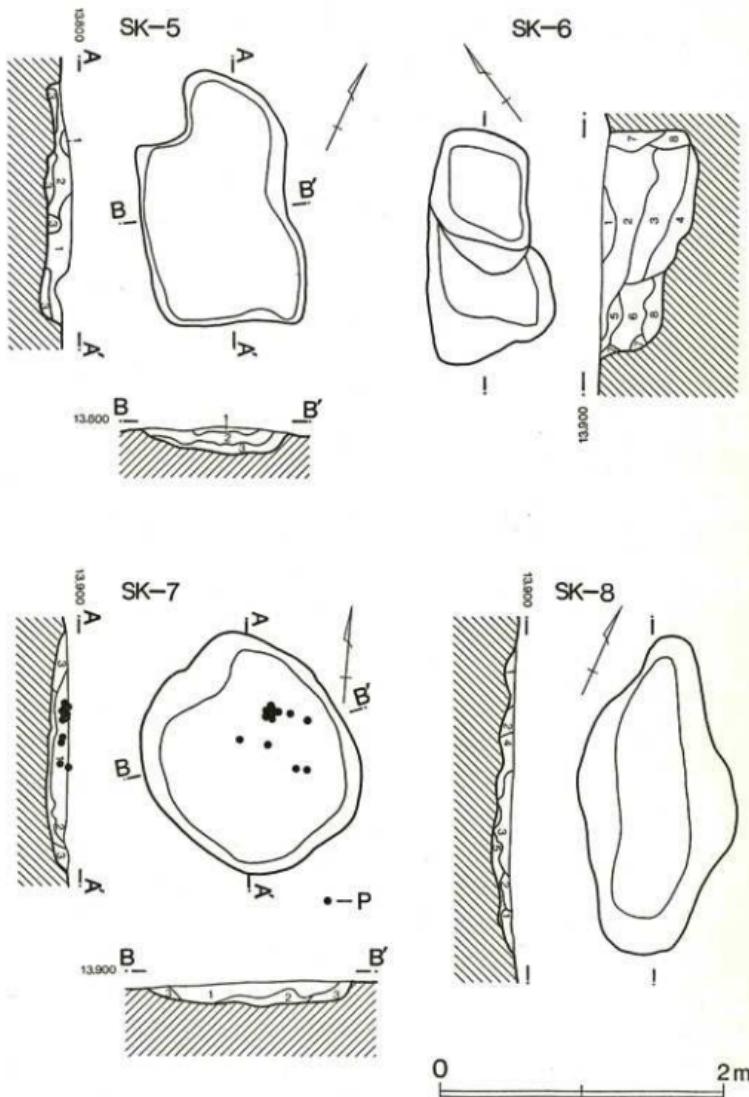
第5層 褐色土 スコリア・炭化物粒を若干含む。

第6層 暗茶褐色土 第2層に近似するが、しまり・粘性ともに優れる。

第7層 黄褐色土 ロームによって構成され、粘性が強い。

第8層 暗黄褐色土 第7層に近似するが、ロームブロックを多く含み粘性が非常に強い。

(遺物) 見られなかった。



第29図 第5・6・7・8号土壤(SK-5・6・7・8)

第7号土壤 (SK-7) (第29図)

(位置) K-6-21グリッド (形状) 不整の円形を呈し、全体は皿状に窪んだ感じとなる。(規模) 170×160×15cm (覆土) 以下の3層に分かれる。

第1層 黒褐色土 ロームブロックを良く含み、しまりも良い。

第2層 明茶褐色土 ローム粒を若干含むが、しまり弱くバサつく。

第3層 褐色土 ローム粒を少量含む。しまり・粘性ともに良好。

(遺物) 中央から北寄りの覆土上位に第V群土器12点が出土している。

第8号土壤 (SK-8) (第29図)

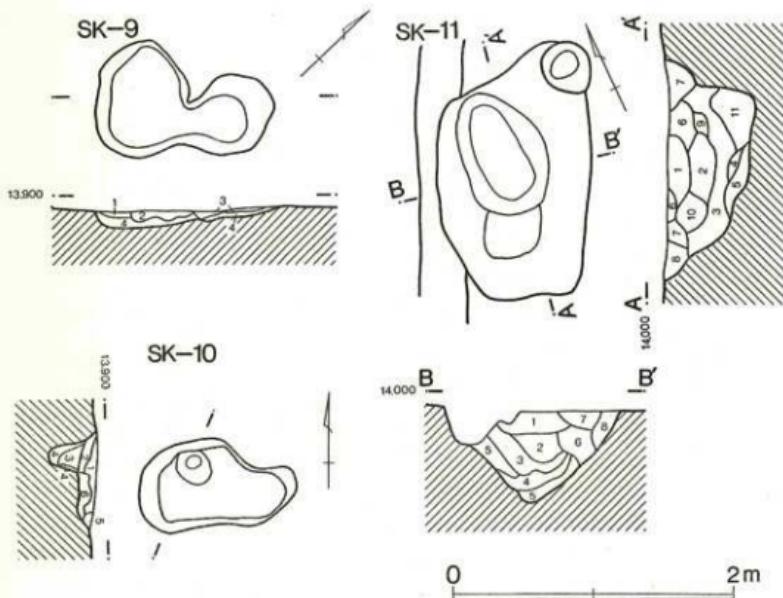
(位置) K-6-21グリッド (形状) 長梢円形を呈し、床面は凹凸が激しい。(規模) 225×110×20cm (主軸方向) N-19°-W (覆土) 以下の5層に分けられる。

第1層 暗茶褐色土 ローム・炭化物粒を若干含み、きめ粗くしまり悪い。

第2層 暗茶褐色土 黒色土中にローム粒が多量に混じる。きめ細かいがしまり弱い。

第3層 茶褐色土 ローム粒を全体に含む。きめ粗くバサつく。

第4層 黒色土 ローム粒を少量含むが概ね單一的となる。きめ細かくしまり有り。



第30図 第9・10・11号土壤 (SK-9・10・11)

第5層 暗黄褐色土 大形（径20~30mm）のロームブロックで構成され、しまり・粘性が強い。
 （遺物）見られなかった。

第9号土壤（SK-9）（第30図）

（位置）L-6-1グリッド（形状）瓢箪形で、床面は南へ向って傾斜している。土壤2基が切り合うものかもしれない。尚、北側の覆土上位に焼土が見られる。（規模）130×85(50)×15cm（覆土）以下の4層に分かれる。

第1層 暗茶褐色土 ローム粒を少量含む。しまり・粘性ともに良い。

第2層 褐色土 ロームブロックを多く含むが、しまり悪くボソつく。

第3層 暗赤褐色土（焼土層）きめ細かいが、しまり悪くバサつく。

第4層 黄褐色土 ほとんどローム質で、床面の溶軟化層。

（遺物）見られなかった。

第10号土壤（SK-10）（第30図）

（位置）K-5-23グリッド（形状）不整の楕円形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、西寄りに径25cm、深さ20cm程のピットが穿たれる。あるいはピットが新しいものかもしれない。尚、覆土上位には焼土層が認められる。（規模）115×60×12cm（主軸方向）ほぼE-W（覆土）以下の5層に分かれる。

第1層 暗赤褐色土（焼土層）焼土粒・ブロックから成る。

第2層 暗褐色土 きめ細かいがしまり弱くバサつく。焼土は見られない。

第3層 茶褐色土 ローム粒を少量含み、粘性が強い。

第4層 暗黄褐色土 ほとんどローム質となる。

第5層 暗黄色土 ロームの小ブロックで構成される。

第6層 黄褐色土 加熱されたロームブロックからなり、粘性は非常に弱い。

（遺物）見られなかった。

第11号土壤（SK-11）（第30図）

（位置）L-6-18グリッド（形状）隅丸長方形を呈し、北東隅にはピットが設けられる。また、北寄りにはもう一段土壤状の掘り込みが見られ。東西の断面は緩いV字形を示す。（規模）160×110×65cm（主軸方向）N-20°-E（覆土）以下の11層に分けられる。

第2層 黒色土 少量のローム粒と微量のスコリア粒を含む。しまりは強い。

第2層 黒色土 ロームを全体に薄く溶混し、しまり・粘性ともに優れる。

第3層 黒色土 第2層に近似するがローム粒は少ない。さらにしまり・粘性ともに強い。

第4層 暗茶褐色土 ローム粒を少量含むが、概ね单一の土層となる。

第5層 暗茶褐色土 ロームを薄く全体に溶混する。しまり・粘性とも一番強い。

第6層 黑褐色土 ロームを粗く含有し、スコリア粒も若干見られる。

明花向A

- 第7層 暗茶褐色土 ローム粒を少量含む。他層に比して粘性が劣る。
- 第8層 暗黄褐色土 きめ細かいが、粘性弱くパサつく。
- 第9層 黒褐色土 ロームのブロック溶混がよく見られる。
- 第10層 茶褐色土 褐色の斑文が見られ、しまり粘性は非常に強い。
- 第11層 黒褐色土 全体に黄ばんだ感じで、きめ細かくしまりも強い。スコリア粒をわずかに含む。
- (遺物) 第V群土器が数点出土している。

第12号土壤 (SK-12) (第27図)

(位置) M-6-4グリッド (形状) 深い溝状を呈するTピットである。底面は平坦であるが、北側は一段屈曲をなしてから立ち上がる。壁はほぼ垂直で、横断面は細い逆台形を示す。一部をSF-5に切断される他、南側で浅い土壤状の張り出しが見られる。(規模) 400×60×70cm (主軸方向) N-40°-E (覆土) 以下の4層である。第1~6層はSF-5参照。

第7層 茶褐色土 しまり良いがボソつく。ロームブロックを多く溶混するためやや斑文を呈する。

第8層 暗黄褐色土 全体にロームを溶混するため单一的土層となる。しまり・粘性ともに優れる。

第9層 暗黄色土 ほとんどロームによって構成されるが、粘性弱くボソつく。

第10層 明褐色土 第7層に近似するが、ロームを薄く溶混して单一的となる。

(遺物) 上位より第V群土器が少量出土しているが、いずれも少片で図示できなかった。

第13号土壤 (SK-13) (第31図)

(位置) M-7-1グリッド (形状) 南を近代の攪乱壠によって切断されているが、深い溝状を示すTピットである。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。また横断面は深く切れ込んでおり、側では一段浅くなっている。(規模) 290×70×115cm (主軸方向) N-25°-W (覆土) 以下の7層に分けられる。

第1層 耕作土

第2層 茶褐色土 ローム粒を良く含むが、しまり弱くパサつく。

第3層 明茶褐色土 ローム粒ブロック、黒色土粒から成るが、しまり弱くパサパサ。

第3層 茶褐色土 ローム・ブロックを良く含むがしまり・粘性ともに弱い。

第5層 明茶褐色土 ロームを全体に溶混し、黄色味を帯びる。しまり・粘性ともに強い。

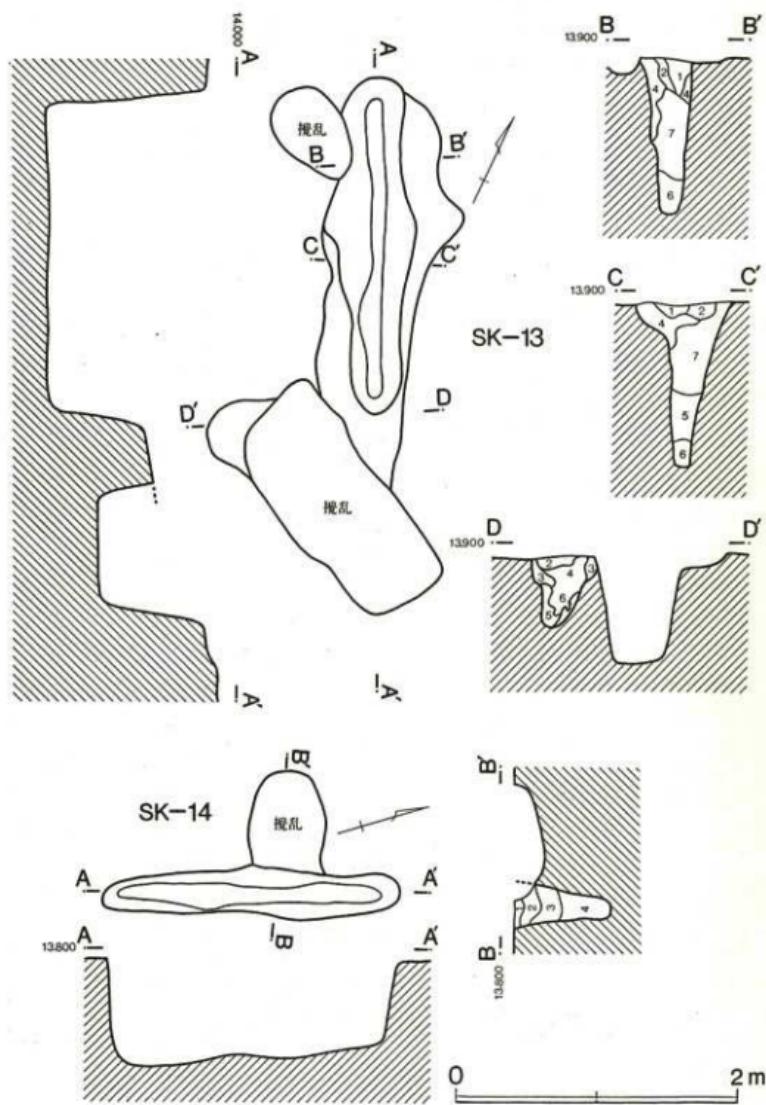
第6層 茶褐色土 ローム及び炭化物粒を良く含む。粘性非常に強い。

第7層 暗茶褐色土 ローム・スコリア・炭化物粒を少量含む。

(遺物) 覆土上層より少量の第V群土器が出土している。

第14号土壤 (SK-14) (第31図)

(位置) M-6-18グリッド (形状) 細長く深い溝状のTピットで、西側の一部を近世の土壤によって攪乱される。底面は南側でやや深くなり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。横断面は深く切れ込ん



第31図 第13・14号土壤 (SK-13・14)

第4表 明花向遺跡A区縄文時代土壤一覧表

番号	グリッド	形態	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	主軸方向	出土遺部	備考
1	J-5-3	長椭円形	250	130	20	N-44°-W		
2	J-5-3	長椭円形	160	120	15	N-81°-W		
3	J-5-3	不整形	120	80	10			
4	J-5-8	円形	170	150	15			
5	K-5-25	隅丸方形	180	110	20	N-33°-W		
6	K-6-21	隅丸方形	100	70	70(北)	N-37°-E		
			90	90	45(南)			
7	K-6-21	不整円形	170	160	15		第34図1-2	
8	K-6-21	長椭円形	225	110	20	N-19°-W		
9	K-6-1	瓢箪形	130	85(50)	15			
10	K-5-23	不整椭円形	115	60	12	E-W		
11	L-6-18	隅丸長方形	160	110	65	N-20°-E	第34図3	
12	M-6-4	長椭円形	400	60	70	N-40°-E		Tピット
13	M-7-1	長椭円形	290	70	115	N-25°-W	第34図4-5	Tピット
14	M-6-18	長椭円形	215	30	75	N-15°-W		Tピット

第5表 明花向遺跡A区近世墓壙一覧表

番号	グリッド	形態	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	主軸方向	出土遺物	備考
1	M-5-9	不整椭円形	105	80	20	N-50°-W		
2	M-5-9	隅丸長方形	170	60	65	N-13°-E		
3	M-5-20	隅丸長方形	100	70	50	N-28°W	永楽通宝6枚	
4	M-5-20	長方形	(110)	65	35	N-45°-W	寛永通宝6枚	
5	M-5-20-25	長方形	130	90	70	N-30°-W		
6	M-5-19	隅丸長方形	115	55	45	N-29°-W	寛永通宝16枚	
7	M-5-25	隅丸長方形	105	80	40	N-41°-W		火葬墓
8	M-5-25	不整隅丸長方形	135	130	40	N-83°-W		
9	M-5-25	不整椭円形	140	80	40	N-24°-W		
10	M-5-25	椭円形	120	85	65	N-17°-W		
11	M-5-25	不整方形	110	110	40			
12	N-5-5	椭円形	100	50	15	N-52°-W		
13	N-5-5	椭円形	90	50	30	E-W		
14	N-5-5	長方形	100	55	50	N-69°-W		
15	N-6-1	椭円形	140	75	24	N-17°-W		
16	N-5-10	円筒形	85	80	15			
17	N-5-15	円筒形	85	80	50		寛永通宝6枚	

だ狭幅のものとなる。（規模） $215 \times 30 \times 75\text{cm}$ （主軸方向）N-15°-E（覆土）以下の4層に分かれる。

第1層 黄褐色土 ローム粒を良く含み、しまり良好。

第2層 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含む他、スコリア・カーボン粒も若干見られる。

第3層 茶褐色土ロームブロックの溶混が多く見られ、やや斑文状となる。

第4層 晴茶褐色土 ロームを全体に溶混し、若干の黒色土と炭化物が見られる。

（遺物）見られなかった。

（飼持 和夫）

(4) 遺構出土の土器

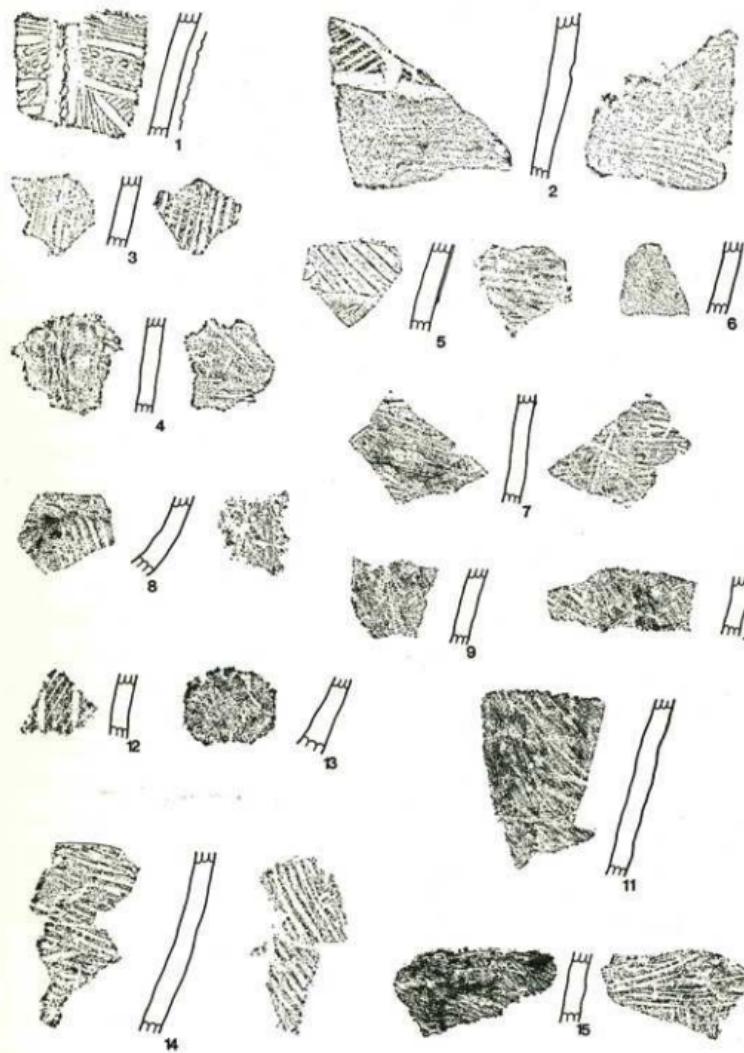
第1号堅穴状遺構（第32図1～3、第35図3・4、第39図2・3）

出土した土器は全て第V群土器で、推定復原の可能なもののが2個体である。第35図3は、推定口径約26cm、器高約35cm前後を測り、現存高は21cmを測る。胴上半部に段を持ち、段から上は直立気味にやや開き、口縁部は外傾する。底部は丸底状に近いものと思われる。やや幅広の文様帶は段から上に形成され、全周の約四分の一が現存する。文様帶は二本対の細隆起線によって縱に分割され、さらに分割された内部は同種の細隆起線で区画されている。区画内は細沈線を充填する箇所が多いが、区画と同種の細隆起線を充填する部分も存在する。口唇部には異方向の刻目が交互に施される。器表面には条痕は見られないが、裏面では条痕が認められる。纖維を少量含む。

第35図4は推定口径約26cm、現存高22cmを測る波状口縁の土器である。口縁は4単位の緩い波状を呈するものと思われ、刻目が施される。胴上半部がやや括れ、口縁部は内弯気味に開き、底部は尖底というよりも丸味を帯びたものになると思われる。口縁文様帶は胸部の若干括れる部分に一条廻る太沈線によって分帶され、更に同種の沈線が波頂部と波底部から垂下され、縱に分割されている。また、分割内は同種の太沈線によって傳状に区画され、区画内は上下左右対向する細沈線が充填されるが、一箇所には刺突文が充填されている。この刺突は、角棒状の施文具によって施されている。文様帶の分帶、分割、区画に使用される太沈線は、同一施文具によるものと思われ、太目の竹管状施文具の外側が使用されているものと判断される。口縁部文様帶外の胴部には、条痕は認められず、擦痕状の無文部となる。文様帶内は僅かに条痕が認められ、裏面には条痕が顕著に施されている。纖維を少量含んでいる。この3・4は胎土焼成、色調ともよく類似し、文様構成、区画の手法、充填文等のバラエティーを示しているものと思われる。

他に破片（第32図1～3）が少量出土している。1は小さな刻目の施される高目の隆帶が垂下され、文様帶が分割されるものと思われる。区画は太沈線で行なわれ、細沈線と同種の施文具による刺突文が区画内に充填される。纖維を少量含むが胎土は緻密であり、焼成は良好である。裏面は条痕施文後、幅広の工具で擦痕状のなでが施される。

2は太沈線で文様帶が分帶、分割、区画され、区画内に細沈線が充填される。表裏面に条痕が認められる。文様抽出法と施文具との関係は、第35図4と共に通する。



第32図 遺構出土土器(1)

3は表面に浅い条痕が、裏面に深い条痕が施され、繊維を少量含む。

第2号竪穴状遺構（第32図4～8）

出土遺物は全て、第V群土器である。5は細隆起線区画の中に、異方向斜位の同種の細隆起線を充填している。裏面に条痕が施文される。胎土は繊維を少量含むが緻密で、焼成は良好である。7は5と同一個体と思われ、一部分に細隆起線が認められる。

6は無文土器で、裏面に僅かに擦痕が認められる。胎土は繊維を若干含み、細砂粒と白色粒子が目立つ。4と8は表裏面に条痕が施文されるもので、4の表面にはなでが認められる。共に繊維を含む。8は底部近くの破片である。

第1号炉穴（第32図9～11）

出土した遺物は全て第V群土器である。9～11は同一個体であり、表面に僅かに条痕を残す。裏面は剥落が激しく、条痕の有無は識別出来ない。胎土は若干繊維を含み、小謫、細砂、白色粒子が目立つ。有文土器の出土はなかった。

第2号炉穴（第32図12～15、第35図1、第36図1・2、第37図1）

F₂、F₃から大形破片が集中して出土し、復原可能なものは有文土器1個体、条痕文土器2個体が出土した。第35図1は推定口径約28cm、現存高21cmを測る。胴上半部に段が存在し、段から上方に口縁部文様帶となり外反する。段から下は丸底状の底部へ移行するものと思われる。口縁は6単位の波状口縁になると推定され、約半周が現存する。口唇部には刻目が施される。文様帶は段によって分帯され、波頂部から段まで垂下する太沈線で分割される。波状に合わせて、波頂間の口縁下に弧状の太沈線が施文され、波頂下に垂下する太沈線と交わる。波底部は弧状沈線から段に向って太沈線が垂下し、文様帶を分割している。波頂部と波底部から垂下する沈線によって、文様帶は都合8分割されるものと推察される。更に、分割内は同種の太沈線で擗状に区画されるが、部分的には斜平行に区画される箇所も存在する。区画内は全て細沈線が充填される。口縁下の弧状区画内にも斜位の細沈線が充填されている。繊維を少量含む。条痕は表裏面に顕著に認められ、文様帶内にも擦消されずに地文として残存している。

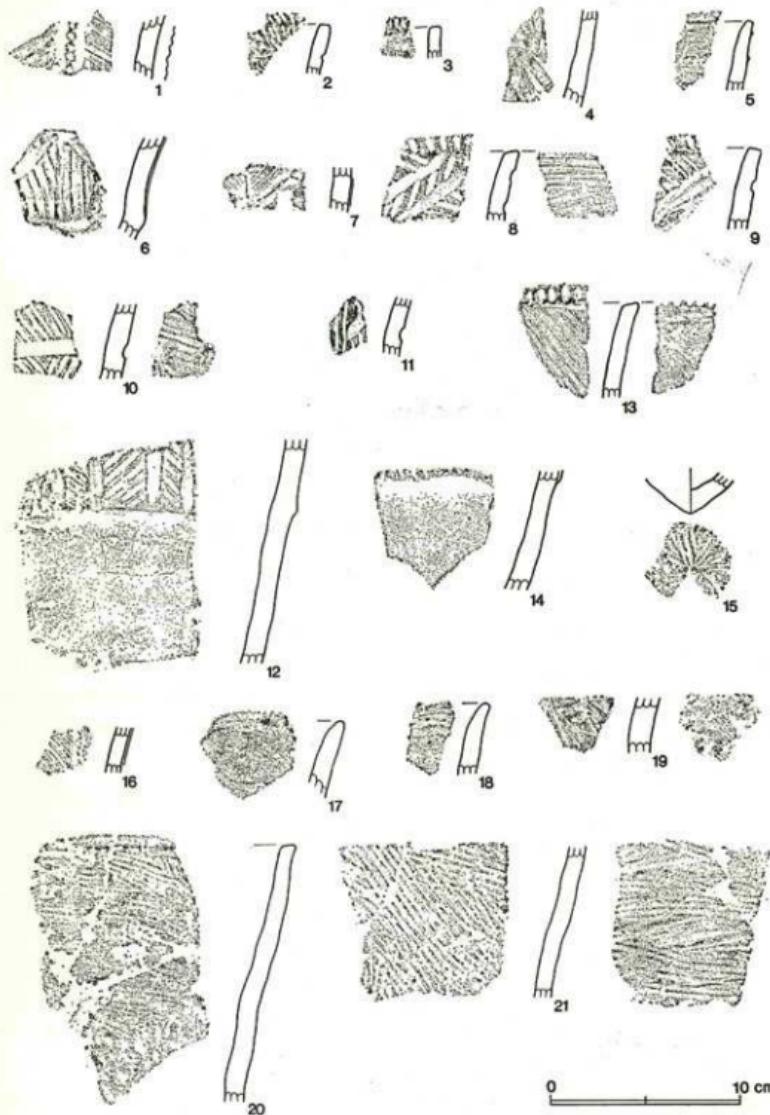
第36図2は胴部破片であり、全周の約半分が現存する。上半部に横位の条痕が施文され、それ以下は斜位となる。裏面は殆ど斜位の条痕が施文されている。現存高15cmを測る。

第37図1は下半がやや括れる胴部で、部分的に全周している。上半部で横位に、以下しだいに斜位に条痕が施文される。裏面はほぼ横位に施文される。最大幅24cm、現存高27cmを測る。繊維を少量含む。

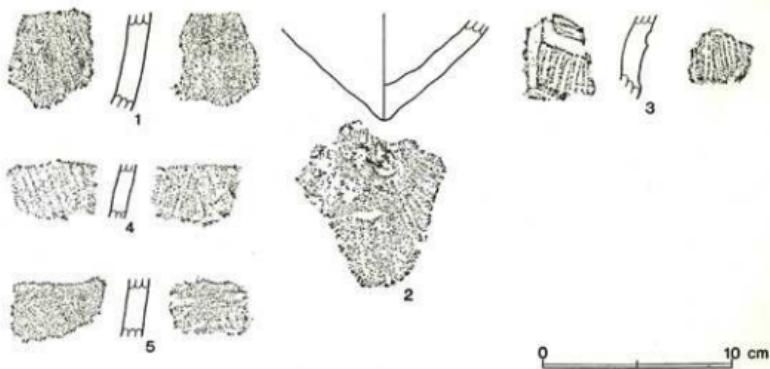
第32図12は平行して垂下する太沈線で区画された内部に、切るような細沈線が斜位に充填されている。繊維を多目に含み、裏面は剥落が著しく条痕の有無は判断されない。13～15は表裏に条痕が施文されるもので、13は底部付近の破片である。15の表面は浅い条痕である。14は繊維を多く含み、13・15は少量含まれる。

第3号炉穴（第33図1～4、第35図2、第38図1～3）

復原可能なものが3個体出土した。出土遺物は全て第V群土器である。第35図は口縁部破片一部と胴部破片から復原したもので、推定口径約22cm、現存高16cmを測る。器形は胴部がやや括れる砲



第33圖 造構出土土器(2)



第34図 造構出土土器(3)

弾形を呈し、底部は尖底というよりも丸味を帯びたものになると思われる。口唇上から刻目の施された隆帶が垂下され、文様帶が分割されたものと思われる。文様帶の下端は不明であるが、底部近くまで存在するものであろう。縱長に分割された内部は、太沈線でやはり縱長の三角形状に区画される。区画内は斜位の細沈線と刺突文がほぼ交互に充填されている。沈線と刺突文とは、同一施文具によるものと思われる。口唇部には刻目が施される。条痕は裏面で顕著に認められる。胎土は若干の繊維を含むが緻密で、焼成は良好である。

第38図2は推定口径約17cm、現存高10cmを測る。口縁部の約四分の一一周が現存する。表面は条痕というよりも擦痕状の整形が認められる。裏面は荒れが激しく、条痕の有無は判別できない。口唇部に刻目は認められない。繊維は少量含まれる。同3は底部であり、先端部を欠損するが、約四分の三が現存する。表面には条痕が施され、繊維を含む。

第33図1は刻目の施される高い隆帶が垂下し、文様帶を分割するもので、細隆起線で区画し、浅い沈線を充填するものである。胎土は繊維を多目に含み、白色粒が目立つ。裏面に条痕が僅かに認められる。同2は口縁部破片であり、口唇部に刻目が施される。沈線で区画された内部に押し引き状の刺突文が充填されている。繊維を若干含む。同3は口縁部破片で、刻目が施される。同4は条痕の上から植物質の施文具によると思われる浅い擦痕が認められる。裏面は条痕が施され、繊維を少量含む。

第4号炉穴（第33図5～15、第37図2～4）

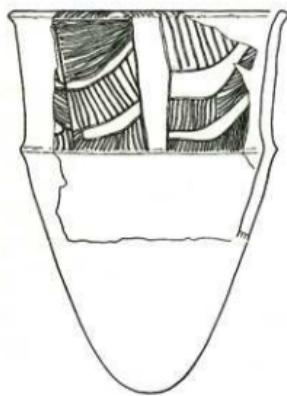
復原可能なものは、口縁部1個体と底部2個体が出土しており、出土遺物は全て第V群土器である。第37図2は推定口径約21cm、現存高11cmを測る口縁部破片で、約四分の一一周が現存する。口唇部は丸頭状で、刻目は施されていない。表裏面とも水平方向から徐々に斜位に移行する条痕が施文される。繊維を少量含む。同3は底部で全周が現存する。丸底に近い尖底を呈し、先端部が若干突出する。器面全面にまんべんなく条痕が施文されており、繊維を少量含む。同4も丸底状の底部で



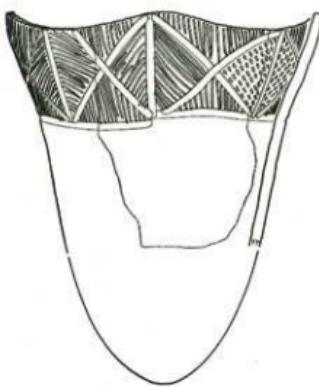
1 SF-2



2 SF-3



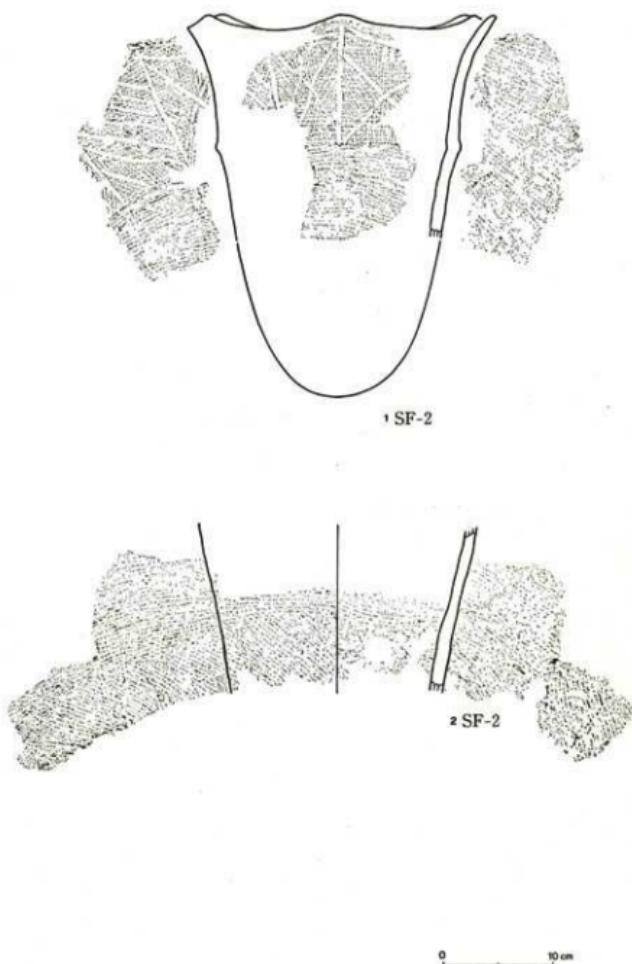
3 SB-1



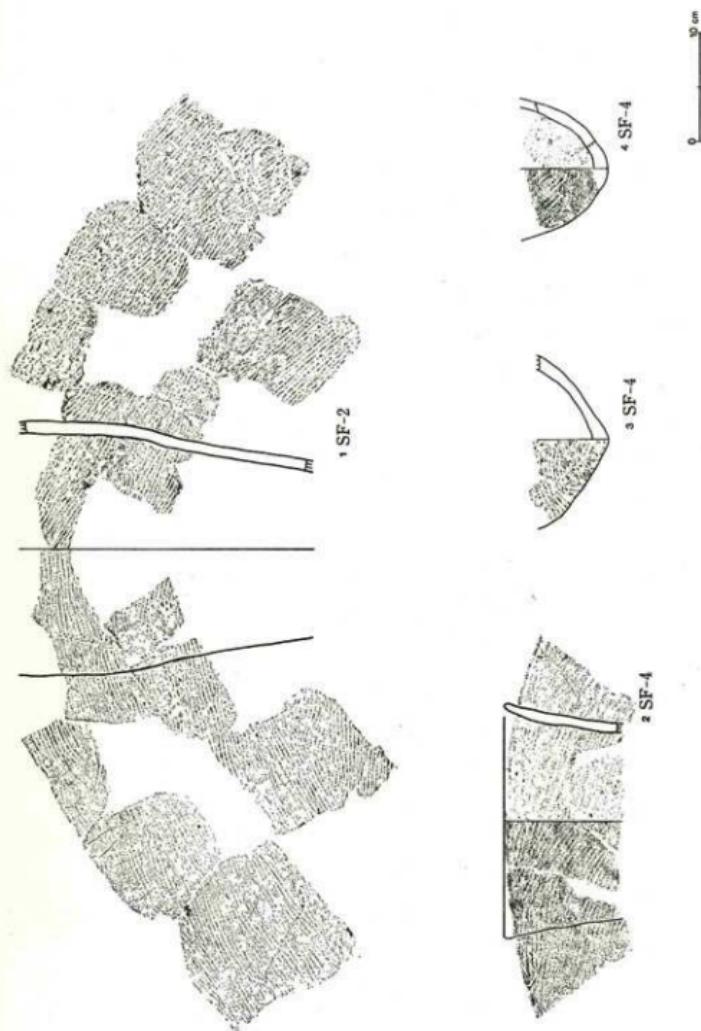
4 SB-1

0 10 cm

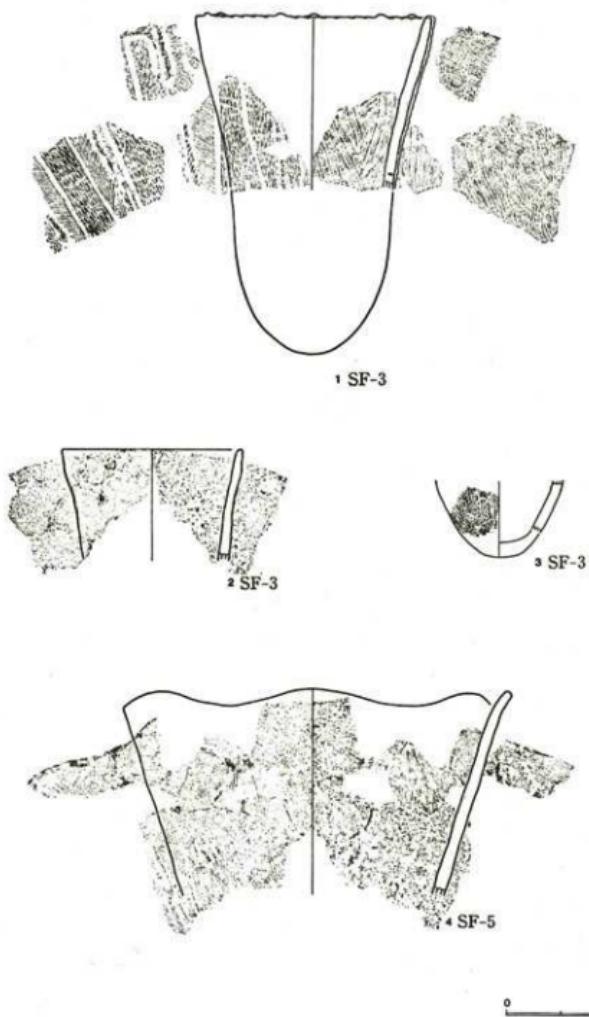
第35図 造構出土土器実測図(1)



第36圖 遺構出土土器実測図(2)

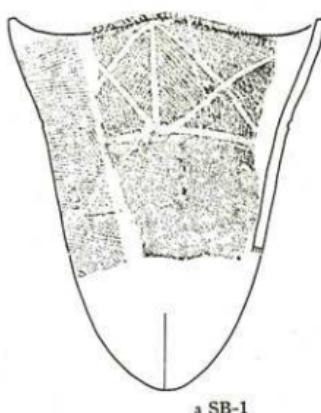
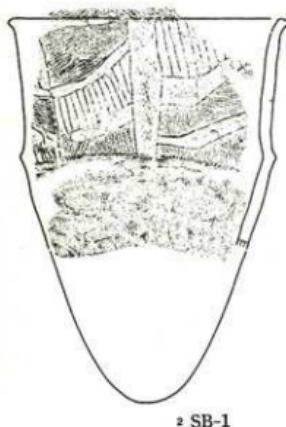
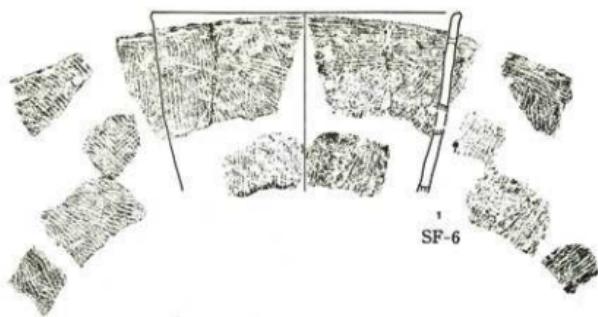


第37圖 墓造構出土土器實測圖(3)



第38图 造構出土土器実測図(4)

明花向A



0 10 cm

第39圖 造構出土土器実測図(5)

あり、先端部を欠損する。表裏面とも条痕が施文され、繊維を少量含む。

第33図5は口縁と併行に2本の細隆起線が配されるもので、先細りの口唇部は平坦で刻目は施されていない。繊維を少量含み、表裏面とも条痕が施文されている。同6は文様帶下端の段の部分であり、細隆起線区画内に細隆起線を充填している。繊維を多目に含み、白色粒子が目立つ。裏面に僅かに条痕が認められる。同7は細隆起線区画内に浅い細沈線が充填されている。繊維を少量含み、裏面に条痕が認められる。同8と9は口縁部破片で、両者とも斜行する太沈線で区画された内部に、やや太目の沈線が充填されている。両者とも繊維を少量含み、裏面に条痕が施される。同10はくっきりとした太沈線で区画され、やや太目の沈線が斜位に充填されている。繊維を少量含み、裏面に条痕が施される。同11も太沈線で区画された内部に細沈線が充填される。繊維はやや多目に含まれている。

同12、14は胴部に段のみられる破片である。12は太沈線が段まで垂下されて文様帶を分割又は区画し、やや太目の沈線を異斜方向に充填している。表裏面とも僅かに条痕が認められ、条痕施文後擦消されていることが観察される。繊維を少量含む。14は段部上に細沈線が施されており、文様帶の下端を示している。表面は条痕がみられず無文となり、裏面は剥落が著しい。12と同様、条痕施文後擦消されたものと思われる。繊維を若干含む。

同13は口唇部が角頭状を呈する口縁部破片で太い施文具によって刻目が施されている。表裏面ともに条痕が施文され、胎土は繊維を若干含み白色粒子が目立つ。同15は底部破片で、尖底の角度は比較的鈍角である。先端部まで丁寧に条痕が施文されている。

第5号炉穴（第33図16～19、第38図4）

出土土器は全て第Ⅶ群であり、復原可能な大形破片1個体分が出土している。第38図4は推定口径約35cm、現存高19cmを測る。大形の波状口縁の土器であり、口唇部に刻目は認められない。表裏面とも擦痕状の条痕が施文され、貝殻によるものかどうか判別しづらい。裏面は剥落が著しい。胎土は若干の繊維を含むが緻密であり、色調は明るい黄褐色を呈する。

第33図16は細隆起線で区画された内部に浅い細沈線が充填されている。裏面には条痕が施文されており、少量の繊維を含む。同17は波状口縁の一部であり、口唇部に刻目は施されない。表裏面とも細かい擦痕が観察される。胎土は繊維を多目に含むが、緻密で白色粒が目立つ。同18はやや小形の土器の口縁部破片であり、口唇部に刻目は認められない。表裏面とも条痕が施文され、繊維を少量含む。同19は表裏面とも条痕が施文され、繊維を多く含み、白色粒が目立つ。

第6号炉穴（第33図20・21、第39図1）

出土土器は全て第Ⅶ群土器で、復原可能なものが1個体分出土した。第39図1は推定口径約28cm現存高16cmを測る。口唇部は若干外へ張り出し、丸味を帯びているが、刻目は施されていない。条痕は表裏面とも施文されているが、施文方向は一定せず表面では縦横無尽に施文され、裏面では横位からしだいに縱位へと変化している。

第33図20は口縁部の大形破片であり、表裏面とも条痕が施文されている。口唇部は丸味を帯びた角頭状を呈し、刻目は施されていない。胎土は繊維を少量含み砂粒と白色粒が目立つ。焼成はあまり良好ではなく、表裏面とも剥落が著しい。同21は表裏面とも条痕が施文される胴部破片で、表面